アルケイア―記録・情報・歴史―
第一九号　二〇二四年一一月　八九―一六四頁
南山アーカイブズ

Self Society a Learning academic community

まどかソサエティ家庭哲学からの社会再構成主義：非西欧圏の西欧型学術＋α和語和学

まどかアッセマ庸代

The Memory of the Faculty of Human Relations as Interdisciplinary Study through the Western modern scientific and logical Literacy + α Orality, *Wa-go Wa-gaku*

madoca society

ASSEMAT Michiyo

Archeia: Documents, Information and History
No.19 November, 2024 pp.89-164
Nanzan Archives

はじめに
第一部
　第二バチカン公会儀 1962-1965 直後のニンカン創立 1974　学際的言語ー戦後をいきる日本の内発的学問体系
　「身」の問題　「己」の問題　「和語」の問題　ニンカン人間関係科10期 -27 最終期生の頃 1983-2000 年
第二部
　「からだとことば」身体論　精神　日本語　戦中戦後　竹内敏晴と詩人谷川俊太郎とメルロポンチ
　「呼びかけ」レッスン　「イエスの見方」「愛の侵略　マザー・テレサとシスターたち」
第三部
　「いのちとことば」生命の科学といのちの和学　自文化　まどかソサエティとパラダイム　社会（再）構成主義
　「場」としての家庭フィロソフィー・コミュニテイ　我が家の幕末と 20c 戦後の教育制度チャレンジ
体験学習による生命科学からの　和語いのちによる和学形成
　空海いろは　白隠和讃　本居宣長山桜　河合隼雄西洋自我を超える日本の昔話　千玄室茶　生命倫理からの
　日本の人格論ニーズ
体験学習によるユング心理学からの「ものがたり」箱庭療法
　木村晴子と河合隼雄「自己探究」「無意識・夢の分析」
おわりにて　はじまり　自ずからみずから（もうひとりの竹内）
　南山学園と神言会の国際的カトリックネットワーク長崎と医に夢を
　ヨハネとトマスの描法　いのちへの和学と科学のアプローチ

Self Society a Learning academic community

まどかソサエティ家庭哲学からの社会再構成主義：非西欧圏の西欧型学術＋α和語和学

まどかアッセマ庸代

はじめに

＋感謝と祈りのうちに

神父様方はじめ、師と仰ぐ諸先生方、お世話になった多くの研究者同僚方への敬称略を、予めお詫び申し上げます。学のご縁を温めつつ、文献に名を留め、「人間関係科ここを学生にとって天国にしたい！」細身長身白髭メリット初代学科長の、ニンカンスタッフを含めたこどもたちへの真面目で噛み締めるアメリカン日本語の退職後もいらした共同研究室でのいきづかいがいつも目に浮かびます。

ここに、日本の大学研究機関と高等教育の一機関として南山学園に誕生した「ニンカン（人間関係科 1974-2000.3.31）」「ニンカンセンター（人間関係研究センター）という呼称で親しまれ、教育と研究コミュニティとしての二十世紀後半の三十年間程の「学際的存在意味」と日本風土の「知の探究法」を試論する。

その為に、研究素材として、「ニンカン」に集った教員スタッフの問題意識と其の研究方法の特徴に着眼する。人間関係科を（学科と言わず、「学」をトルことで「学」を問い直し再考したニンカンスタッフのカリキュラムと授業スタイルの在り方と、それを

支えるコンセプトを挙げる。

創設期の1970年代から1980年代は、大庭征露副学長（哲学）、吉川房枝（在俗修道会カテキスタ会創設、人間関係科命名者、教育心理学）、メリット学科長、上智大学心理学科霜山徳爾教授助言による文部省、立教大学キリスト教教育研究所（JICE）ヒューマンリレーションズ・ラボラトリーのT(トレーニング)グループという集中教育プログラムに関する研究や創設期の資料を通して、先人方により、既に言及されている。（「人間関係科25年のあゆみ（津村）未来（山口）教育の冒険（グラバア）『南山短期大学三十年史』1998及び、南山短期大学ブリティン『南山』38号カラー写真付、37号「創立30周年記念号」等参照）

この小論では、創設十年目1990年代から2000年南山大学新学部編成による移行に至るまで世紀末の教員スタッフのうち、二名、1986年同期着任の竹内敏晴の「からだとことば」呼びかけレッスン、まどか庸代の「いのち（生命）ことば（論理）」生命科学・行動科学からの和学形成の提唱（呼びかけの一つ）に言及する。それにより、ニンカンの人間探究において、「身」の問題、「和語」の問題、「自己化と社会化　Self と Society　公私　個も生き組織全体も生きる　共いきに生きる」自他尊重の関係的人間存在（命）問題が意識化されていたことを示唆考察する。

国連1977アドバイザー、ルネ・デゥボス（ロックフェラー医学研究所）により、今日に至るSDGs持続可能な循環型社会意識をもたらしている。（松田2024）まどかの提唱する生命科学からのまどか和学では、円環型平衡バランスが、個々人の和ことばや心遣いによって生まれる、と捉えている。（まどか2005『円喰』愛・地球博「いのちプロジェクト」企画参画　市民パビリオン）

第一部

カトリック教会史と西欧科学史からのニンカン

第二バチカン公会儀1962-1965後のニンカン創立1973-1974

南山学園とその誕生母体の神言会は、キリスト教の人間観を基盤として、人の誕生から死・再生までひとの一生一貫教育に携わる。教育は人間観の大仕事である。学園は学生自身を取り巻く家庭家族や教職員の家庭家族、神父司祭の生涯や修道修業を通した教育研究の世界をどのように現実化していくかが常に問われ続ける場である。

人として、生き死にすることは、教員学生問わず、ひとの一生の問題意識である。近代の科学的方法をよしとしている学校教育機関において、近代の心理学だけが「人のこころ」をテーマとしているのでは無論ない。20世紀後半の試みは、筆者の半生そのものであり、大正ロマンのちいは家庭の夢と人々の集い「まどかソサエティ」、そして社会活動では、南山短大人間関係科で実現した「ニンカン」ライフで学際・国際・人の際に生かされた。研究教育共同体意識」の20世紀生命科学論や心理学やセルフナラティブなセラピー、自他の関係場の気づきからの「体験学習」等の実践的研究として、なされていた。ここから呈示された科学者共同体内部の「パラダイムシフト」「ポストモダン」科学革命意識ア「社会構成主義」の「個と個の関係的ことば」に繋がる関係的相対的「場」のちからが、「ソサエティ」「環境」として、現実化されていたと考察する。宗教革命如き科学革命 Scientific Revolution と社会再構成 Social (Re-) construction は、南山学園内に誕生した The Study of Human Relations　21番教室とニンカン共同研究室　その思潮（ニンカンスタッフの思想潮流）にあった、とその後心理学領域からの方法論・メタ理論・スタッフの伝統的研究アプローチ論から気づかされる。

医学と先端科学技術による生命医療は、本来、その時代の人々の最高知（知恵と知識）を以っての仕事である（飯島元名古屋大学総長、愛知県芸術文化センター初代総長伝）。西欧医学と東洋中世医学と和漢方　心とからだを繋ぐ関係的統合医療、更には生と死（再生）の概念も医科学と人間のテーマも、教育的システムが問われる。ホリスティック医療医学を通して、人のいのちの包括的学問体系は各領域を超えた学際的対話・交流の場が必要である。結核、がん、難病、という病い気は時代が創り、その時代の限界である。病気であって病気でない、思い方概念のあり方生き方は、家庭や国家のいのちの捉え方や文化的環境による。芸術

芸能の中京地区の地の利を生かせる生徒学生・教職員の力が南山学園の風土歴史を支えていると信じている。大切にし合う場、思いやりの心も、意識空間としての教室であり、環境（場　時空間の提供と人間環境）や校風である。人間関係など言葉使いや声も大切なお薬である。他者や自己と関わる素直な心のことばへの気づきと自他との自己表出は、互いの「人間尊重」「人権尊重」の文化基盤に繋がる。

行動科学研究からの行動療法 Action therapy「行動療法「アサーショントレーニング」素直なことばによる自己表現ワーク（まどか 1986）」は、筆者まどかのニンカンに赴任直後、研修出張としてニンカンセンターから派遣され、そのファシリテーターとしての教員、自己実現としての仕事職場意識を得た。働き方居方を学んだ。SMILE 聖マーガレット生涯教育研究所（大阪）主催スタッフは立教大学学生相談室平木典子（心理学　後に日本女子大教授）であった。ニンカンセンター（名古屋）、アングリカン（英国国教会）の立教大学キリスト教教育研究所（東京）カトリックの上智大学臨床心理学は、元東京大学の霜山徳爾 (1919-2009) 教授（フランクル『夜と霧』、キュブラーロス「がんのワークショップ」訳者。ニンカンでは『われと汝』と共に教科書）と小林純一イエズス会士（上智大学カウンセリングセンター創始　チャプレン）は、思潮を共にしていた。エキュメニカル時流に、ニンカン命名者吉川房枝（南山大学出身・教育心理学東京大学博士課程　ゲマインダー神言会士と共に日本初の在俗修道会創設）は、立教大学ヒューマニティトレーニングラボにて交流があって、ニンカン創設に至った。（林 2022）

筆者まどかは、カトリックミッションスクール出身で、ニンカン着任以前 1970 年代、上智大学生命科学研究所創設 1979 年創設期生（レイモンド建築 9 号館 7 階博士課程生物科学専攻研究室実験・6 階心理学研究室実室験室　国立遺伝学研究所（現、東京大学大学院大学）において、三浦謹一郎分子遺伝部部長の研究室に所属しつつ、分子生物学会創始や日本における生命科学研究所設置に地区説か変わる師の許可のもと、日本女子大カウンセリング講座（カウンセラー養成講座五年間コースにて、エンカウンターグループで柘植明子（シカゴ大学臨床心理学カールロジャース（1902.1.8-1987.2.4）に師事。『人は人によりて心理学の新しい潮

流』訳者）にてまどかは、直接指導を受け、柘植執筆論文も、頂き、研究者マナーに触れた。Client- centered therapy の思潮に触れていたことになる。

クライエント来談者中心療法 Client-Centered Therapy、エンカウンターグループを提唱した。カウンセラーの人間関係能力の開発と心理的成長にフォーカスしたグループ体験である。60年代のヒューマンポテンシャリズム運動の中で発展した、という。ニンカン後の歴史では、故坂中正義（2021 享年五十歳）（南山大学心理人間学科教授 2013 福岡教育大学より着任）はパーソンセンタード・アプローチを人間性心理学会理事及び人間関係研究センター研究活動で多大な資料紹介で推進された。（『人間関係研究』2021 他）ニンカンスタッフコミュニティは、ニンカンセンター員のつながりに生かされている。

本年 2024 は、南山学園史では、南山大学いりなかキャンパスから山里キャンパス（レイモンド建築賞受賞）移転60周年目、人間関係科創設ニンカン創設50周年目である。

筆者まどかが、南山大学神学部組織神学聴講と女子学生寮マリアハウス舎監としてニンカン科目「女性論」担当時、既にニンカン十期生を迎えていた。ニンカン創設一期生は、本年古稀。筆者自身と同年代となる。ニンカン誕生の 1970 年代の学の時流は、同じ大学生時代を過ごした次世代を担う若者同士として、として、亦、同時代的コンテンポラリーな学術芸術の思潮に関与していたことをここに、あらため手あらためて自覚し合う機会とし、現代の「今、ここ」「ひとのこころ」の無心　童心　しん（真　信　心　芯　新　親身）の源泉を辿る。知識と智慧の場としての学の庭園　祈りと感謝のうちに。

人間関係科は、今から25年前に南山学園の一高等教育機関として二十七期生卒業を以て、一学科一構成スクールの時代的任務の「終焉」を迎え（まどか 1999）を迎え、「発展的希望を以て「南山大学人文学部心理人間学科」として、」発展解消、世代交代を迎えた。尚、この「ニンカン」と呼称された教育研究コミュニティは南山短期大学人間関係科　1974 創設生入学 -2000.3.31 二十七期生卒業まで・教員南山大学心理人間学科移籍、南山短期大学人間関係科、南山大学教育学部教育学科、全学共通教育体育との合併による人文学部心理人間学科への新学科への発展的解消によるニンカン風土、文化伝承が期待された。

ニンカン創設に関する歴史や資料は、既に諸々報告されている。

『人間の尊厳のために　南山学園の歩み』（和木康光 2010）は、スクールモットーで題された。マルクス南山大学学長カルマーノ理事長、カルマーノ学長・マルクス学長時代に南山学園史を中部新聞で概観され、人間関係科の特徴についての記述は、「人間中心の教育」の実現とし、構成メンバーであるスタッフ一人ひとりの尊厳の生かされる描写である。発行年に大学では学長室より教員全員に配布された。

和木（2010）によれば、ニンカン誕生史（p.205,209-230）は、南山大学学生運動等ヒルシュマイヤー学長ボルド理事長時代にメリット初代人間関係科学科長の人間中心の教育へ、マルクス学長によるファミリー意識の終焉脱却（P.276）、カルマーノへの影響 academic community（p.314）としての大学構想は、learning community ニンカン共同体からの大きな変換であり、スタッフ構成も公立大学化していく。

その第3章満ちる時はいま「花嵐は吹けど」と第4章『新天地に撒く麦』の直前頁に、ニンカンスタッフ描写がある。（以下引用文、スタッフ名は筆者加筆）

「教員の構成も注目された。標榜する“ 人間の教育 “ の基礎となる人間観を持つ人物で構成されたが、招聘はカトリック教徒（伊藤雅子、神言会士、後大森・中野・まどか）、聖公会信徒（柳原光・リチャード・A・メリット初代学科長）、プロテスタント諸会派（後、中堀仁四郎日本キリスト教団八王子教会牧師）、日本仏教徒（後津村俊充）と幅広くから行われた。教員もそれぞれ持つ宗教観を大切にし、自分の人間観や宗教観を説くなど、全世界的な視座がそこに備えられた。

「人間の尊厳のために」をモットーとする南山短大のユニークで新しい教育の試みがここにあった。この画期的でもある人間関係科は、南山大学人文学部心理人間学科に発展的に受け継がれた。そして二〇〇一年三月までに二十七期生・二千五百二名の卒業生

を送った。」(p.209-210)

ひとりひとりの信念信条をもっている事、個性が生かされている事、必ずしも通念化された大学・女子短大・女子教育ではないこと。南山学園にとっても、カトリックミッションスクールにとってもユニークな学科カリキュラム運営であった個とが、伺い得る記事であった。以下、一部引用し、南山学園におけるニンカンの位置づけと、学園の伝統に受け継がれる「ニンカン文化」「ニンカンという研究共同体で創成されつつあった「関係的「人間関係や人間科学の方法論」の特徴づけの助けとしたい。ニンカン人材に関するもので描かれている。

創設と二十七期生に何人の教員事務職員非常勤講師。アルバイトと称され被雇用職員、卒業生（当時学生からは「おねいさん」と通称されていた。）所謂ニンカン協力者は学生数と共に、記録されるに値する。

一人の教員中心の大学の階段教室講義形式のマスプロ教育が行われている時代に、ニンカンは「人間中心に学生の気づき中心の少人数グループ形式のフロアー絨毯教室での輪になる対話形式である。

ニンカンコミュニティ意識はその構成員スタッフである教育・事務職員とそこで過ごした学生卒業生諸氏に委ねられる。心理人間学科への移籍スタッフは、グラバア（藤岡）、山口5代人間関係科学科長、津村、中野、まどか（アッセマ）、中村、楠本、川浦（8名）である。尚、各人の研究領域関心領域を生かしつつ、キリスト教文化学科へ大森（1名）である。市瀬指導司祭短大単科英語科へ（1名）、七十才定年退職の、伊藤、星野（2名南山短大名誉教授へ）、中堀牧師（キリスト教文化学科非常勤1名）、竹内（聖霊短大1名「からだとことば」元竹内レッスン研修生日本文化学科非常勤による継続）菅野（事務職員1名）アルバイト卒業生が心理人間学科合同研究室、人間関係研究センター事務室、同窓会やニンカンネットで実務と伝統を、ボランティアする。

ニンカンにおいては、各スタッフの信条や研究領域・実践的社会的現場や人々との交流を公私共往来していた。その言及をもって、「人間関係論」「人間論」、「人間関係科論」の相対論的・関係論的・相補的な学際領域の創成がめざされていたことを示唆し

たい。

ニンカン　を天国にしたい！（メリット初代学科長とこどもたち）

幼子が母親を信じるように　人が人を信じ合う時の来ることを祈ろう（板村真民　仏教詩人）

スクールコーポレーションは　教職員学生の織りなす人間観の場

南山学園史は、神言会会員による神言会の歴史と共にある、と心得る。

歴史と歴史学は違う。教育と教育学は違う。経済と経済学は違う。人の営みは学問領域名だけでは描けないので、ある限定において描き、説明する。

現代科学や西欧近代科学は、分科した科学的方法によって、ここに存在しているもの、現実現象という現実体を説明し描こうとする。その描法や方法は、20世紀21世紀に生きる現代日本においては、「大学」の学部学科の「文部科学省」の基準によって法的に規定されながら、教育を受ける基本的人権が保障されている。

「教育は人間観の仕事」である、と捉える。南山学園の各種の学校研究所に集う人々の、「人間観」「人を観る見方や観念、思い方　思想」が、その学園に集う人々の人生を育て合う。年令はその家族も含めて、赤ちゃんから寿命を迎えて一生を過ごすあらゆる年齢層である。南山学園の子どもたちは、幼児から大学生のみならず、その教育職員やその環境にいるあらゆる人々である。

卒業生は同窓生として、また、教育研究・事務行政に関わった全員全ての人々、喩えひととき短期間でも関わったあらゆる人々の「憶い」「意識」が、「アーカイブ」「歴史」として「今ここでの」南山学園になっている。

「学校」「同窓会」「組織」という目に見える形式は分かりやすいが、目には見えない「意識」や「考え方」未だ名付けられていなくともその人々のコンセプトや既成の「概念」「価値観」や「観念」は「南山学園を通して「思潮の歴史のプロセス」として生きている。

様々な南山学園の年月を過ごしつつ意識無意識のうちに繋がっている。学園は、庭園や宇宙空間のように広大に「いのち」としてつながっている。

従って、人間観は、現代の日本では「宇宙観」「自然観」「生命観」「死生観」という広大にして「無限」の視点をもつ。大いなる聖なるは wholeness Holiness「全」部を包括する。自他を癒し許す大いなる人間観を絶対から相対的にシフトして認識することが20世紀の自然科学（物理学）相対論ファジー論からヒントを得ることができる。補完的・包括的・相補的に人間を観る見方である。

南山学園は人間の「普遍的見方」（カトリック　人間の普遍性の意）として、「キリスト教的」ヒューマニズムを基盤に、カトリックミッションスクールを運営している。学舎（時間空間人間の場）は、日本においては幼稚園から大学・大学院、諸研究所、関連施設として、神言会神父方の国際的ネットワーク、バチカン教皇庁認可の神学者、学者、研究者、教育司牧者の諸活動も、カトリックコミュニティとして存在していることは、「学」の園として、多くの全ての人をひととして認めようとする「器」を担う可能性を保持している。

南山学園の歴史と風土のネットワーク力を「つながり　絆」に

国内では世界の長崎の爆心地近くに位置する神言会と南山中学高校生との交流や現地は学生も教職員にとっても意義深い。長崎大学教育学部の学生と交流し、大学教育学会立花隆『臨死体験』講演企画出張の折りに、世界の注目する長崎爆心地を訪問した。平和公園に近接した小径には校永井隆記念館は如己堂（己の如く人を愛せよ）があり、南山神言会と南山中学高等学校がある事に、大変驚いた。爆心地に隣接していた。

被爆中心点の地、「風・土」、世界唯一被爆国 NIPPON の HIROSHIMA/NAGASAKI ヒロシマ・ナガサキの記憶と歴史を担って、「カトリック医者 Dr.NAGAI 永井博士家族の歴史と思索が、長崎南山では身近であることを、スタッフとして知るべきだった。（1950年代と60年代の小・中学生時代の筆者にとって、永井博士の「我が子よ」テレビドラマとなって、定期的に目に耳に触れていた。）

カトリック神言会の選択決断と生活がある事に、私は、大変感動した。そしてまた、南山学園として、長崎南山の存在と、長崎平和公園という場を、教育や祈りの「人間尊厳」の祈り、医の理　いのちの教室時空間として、私たち教員や神父は、若者をつなげなければという憶いを新たにもった。

「学園」は、カトリック神父養成の何世紀にもわたる国際的基盤と、幼稚園から小中高校・大学・大学院・研究所・修道院・神学校・教会・街創り人つくり国つくりのグランドデザインを展開し、実践する組織力と人材の集まる場として、存在する。国際的視野、学際的視野をもっての学問システムと研究方法論の模索を通して、研究活動や社会活動のみならず、「学」の育成は、幼児から教育職員・研究者・事務行政職員・職業や役職所属を超えた「ひと」一人ひとりの世界の秩序大系価値観への気づきを促している。

学の代表者名一名は一時代意識　一人一人の名前・呼称も時代思潮

学園史は、ひとりの校長名・学長名や理事長名でその時代を顕わされる。年表は一行一名の責任代表者名だが、そこに多くのその時代の教職員スタッフと学生とその家族のいのちや思潮が時代意識として脈々と存在し、歴史風土となる。

地球の人類・人間の歴史は、例えば、西洋暦はキリスト紀元で、キリスト名イエスの歴史（生涯）は、次の使徒心経・信経クレドで口伝される。「信じる」、もしくは「声」にして「唱和し唱える」ことで、歴史の史実にして「今　ここ」にその命名された人のいのちが「立ち現れる」（大森荘三）。

「立ち現れる」とは、大森荘三（物理学、科学哲学）の存在論、存在の仕方のキーコンセプトである。西洋のアトミズム（原子論）

と日本のアニミズムを1974八王子セミナー基調講演主題
大学一年（まどか）当時自然科学分子生物学での名前蛭田庸代学生代表挨拶「生と死の学　科学人と宗教人の対話を求めて」とした。17歳からの問題意識が一生続いている。
現世現実社会という、この世の縁有る人々は誰か?アーカイブ南山史料作成にあたり　ひととの出合い、ニンカンでのひとときにして永遠なる出合いは何か?
クレド使徒信条という、カトリック信経や仏説般若心経は、人間と宇宙の一生観や死生観・人生観が、信仰宣言や「祈りのことば」や教えとして諳誦され、唱えることで歴史風土文化として伝承される。ニンカン風土、親の思いや希望・いのりでもある、まどかソサエティは、子を通して、スタッフ家族や卒業生家族を通して、そのいのちは、何らかの形で生かされていると思われる。

使徒信条（2024ドン・ボスコ社「カトリック手帳」）

「天地の創造主　全能の父を信じます
父の一人子　私達の主　イエスキリストを信じます
主は聖霊によって宿り
乙女マリアから生まれ（この世誕生）
ポンシオピラトの下で苦しみを受け十字架（死刑法）につけられ
死に葬られ
黄泉に下り
三日目に復活（復活）して天に昇り（昇天）
全能の父の右の座（あの世）に付き

生者と死者を裁く（選択採決）為に来られます
聖霊を信じ
聖なる普遍（カトリック）の教会（カミなる主の住まう人々の集う場）
聖徒の交わり（かかわり）
からだの復活
永遠のいのち
を信じます」
（改行、括弧、傍線　筆者による）
わずか三名の名によって、キリストイエスのいのちがアーカイブされ、諳誦される
神　主の名　神の名（和語では神名はカンナ＝仮名カナ＝平かな＝多数のカミの名）
聖霊（大いなるもの）とマリア　出合い　愛という創造場　身
ポンシオピラトの時代
　イエスの一生を決定づけた神の人への愛、

われわれ（あなた）は　今、何を　主と呼ぶか
　人は一生をかけて　応えていきる
　　おかあさぁん　と呼ぶこともある
　　かみさまぁ　と呼ぶこともある

「あなたは誰?
誰でもないわ　まだ。」
（竹内敏晴「椅子」より）『表現による自己成長』

「まどやかに　集おうとする
そんな場で　ひとは育つ」
（ちち芳郎はは八千代「まどかソサエティ」）

「わたしのライフワークは
科学と宗教の対話　異文化とのなかよし」
（中庸の庸代17才「ひとしづくのいのち」）

第二部

身　おのれ　自己　persona への研究アプローチ法
竹内敏晴の戦中戦後とまどか庸代の戦後「精神」探究法のもがき

まどかは、「まどかソサエティ」という父母の名付けた家庭の別名を以ての、戦後復興の思いから、「まどやかに集おうとする、そんな場でひとは育つ」という家庭フィロソフィーと　20c 生命科学からによる和学形成に至る。

竹内敏晴とは、まどか（蛭田）庸代は南山短大に、昭和61年1986年同期竹内62才人間関係科教授、まどか32才自然科学概論講師のニンカンスタッフライフ同期生である。その四年程前に南山大学女子学生寮舎監・人間関係科女性論非常勤。スペイン留学（バイオエシックス　倫理神学）・南山大学神学部聴講生等で、ニンカンスタッフと交流はあった。その直前　樋田大二郎（社会学通称大ちゃん）直後市瀬英昭神父（典礼学　いっちゃん）と続く。自然科学概論前任は小川真理子三重大へ赴任、野庭啓一南山大哲学科後東北大総長で、横山輝雄、小林伝司とは東京大学科学史・科学哲学の村上陽一郎師を通して南山短大・大学で勉強会をしていた時機である。

竹内は、「からだとことば」「表現による自己成長」という科目名を人間関係各論に据えた。一方、まどかは「いのちとことば」を人間関係各論に据えた。「いのち　医の理　いのり」「生命科学と文化ゼミいのちとことば」心理人間学科目となった。人を「いのち」と見る視座である。

この「いのち」はヨハネ福音書の描くイエスのことば「私は道であり、真理であり、いのちである。」この平仮名のいのちとは何か、という中高時代の自身への衝撃に由来する。

木村晴子ものがたり　日本の神話的アプローチによる心理学、中野清による「日本語」からの存在論的アプローチ、ラテン語から日本語和の中世哲学研究から自らをポエマーと自称し、詩人、叙情詩による人間論を展開した。ラテン語と日本語を重んじていた。竹内・中野・土屋友章日本語学科南山宗教文化研究所後早稲田大学生命倫理は道元『正法眼蔵』読書会をしていた。木村とまどかは阿南成一社会倫理研究所長と研究会に呼ばれた。

教員スタッフひとりひとりの個性やリアリティへのアプローチと描法を尊重をしていた。授業チームを組み乍ら、年間の授業やスタッフミーティング（通称スタミ）を通して、尊重していた。ひとりひとりが在ったニンカンスタッフ同志の個性尊重が「人間への尊厳のために」だったかもしれない。

スクールモットーよりは、体験学習による授業名称に「人間中心の教育」（星野・まどか）「教育と人間」（メリット・まどか）等、Client-centered therapy、Student-centered study が志向されていた。

竹内の「からだとことば」「表出　表現による自己成長」

竹内が、メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』、その後の『意識と言語の獲得』において言語の3つの機能、すなわち、表示機能　表出機能　三つ目に「呼びかけ」とある。竹内自身は「呼びかけのレッスン」をしている関心から、「呼びかけとは他者を呼び出すことだと思う。つまり、相手を呼び出すことによって「私」も生まれてくる。「あなた」が生まれてくると同時に「私」も生まれてくる。そういう関係を実現する行為がよびかけだと感じている。」（中略）近代的自我が対象としての他者に情報を伝えるというようなことでは成り立たない。レッスンをしていると、相手は自分が呼ばれていると感じない。逆にそこにいるある日とのからだにひきつけられるーということは存在が呼びかけてくる。（それ）で、これに応える。なんで自分はあのひとに声をかける。あの人のからだがこちらに呼びかけてくるから、という響き合いがある。

身体というロゴス（身体そのものが複雑な構造を持ち、近くの構造と行動の近くである。その構造自体がロゴスだと。）という解説を受けて、竹内曰く、「なるほど、すると、それはラティオとは違う。ロゴスからラティオにまっすぐ繋がっていく訳ではないんですね。」「意識の次元のステップがある。」と。

ことばが生まれる時（幼児の対人関係）「近代的自我」がどのように形成されるか。近代西欧の「精神」「ロゴス」では語りきれないものを、探していた。東大文学部の学生時代から、ニンカンライフの授業、竹内レッスンや芝居、人が人に「かかわる」という探究の場面を、自他のからだに問うている。

竹内のみた「イエス」の呼びかけと「マザーテレサとシスターたち」の愛

竹内は東京出身にて竹内演劇研究所主宰、ぶどうの会、竹内レッスン等既に著名であり、大竹しのぶや歌舞伎俳優へのレッスンや、宮城教育大学での教員養成や夜間学生との授業、詩人谷川俊太郎との交流、身体論をめぐる研究者たちからも注目される時代にいた。そこに、メリット学科長の教育観との出合いから、南山の人間関係科ニンカンに、引越してきた。カトリックやキリスト教の人々の環境も意識されていた。

竹内のイエスキリストに関する記述（1996『岩波講座現代社会学第4巻　身体と間身体の社会学』）は、イエスのからだ、声、呼びかけ、人への愛と教えを想起させる。

農村の教育に至る二宮尊徳の農業の時代と仏教的要素の影響に関する記述の後に続くイエスの呼びかけに関する記述である。

(p117　l.14-18)

哲学者ハンナ・アーレントの最期の著書『精神(mind)の生活』において、イェルサレムのアイヒマン裁判傍聴での弾圧と虐殺の実施隊長が、＝何も考えていないのだ＝と発見し、ここからかの女は悪とはそれへの意志は必要なく、考えることの欠如から生じはしないか、と考え始まる。（中略）みずからの慣習に意義を申し立てをするものは「だれ」か?

ひそかに異議申し立てをするものは今のわたしにはからだの下層次元の、深いなまな感じ、というほかないのだが。（中略）ならば表層の言語によって言語自身を超え、からだとのかかわりの下層次元へひき返し、そこへ呼びかける「ことば」がありうるだろう。

ヨハネの福音書にヒエロニムスによって後からつけ加えられたとされる有名なエピソオドがある。律法通り石で撃ち殺していいだろうな、とイエスに確かめる。

「あなたたちの中で、罪を犯したことのないものが、まず石をなげなさい。」

そしてまた背を向けて屈みこんだ。

イエスは「まず」という一言で、いきり立った群れに埋没していた一人を呼び覚した。（中略）当事者、つまり群れの行為に混じっているものは一挙に行為の主体としてそこに立たされた自分を発見する。かれは責任の主体として立ち、沈黙のうちに、去る。「考える」という行為の、最も根源の形がここに初めて成った、のだろう。（中略）これが、人間が人間に問う、ということの、人間であることの責務であり、その愛は、女にというよりも、むしろ慣習に立てこもって傲慢する人、に向っている。」(p119　112-14)（傍線まどか）

声の文化と文字の文化を対比し、亘明志 1991「メディアと身体」p224 によれば、書くという技術が、人間に新たなものをもたらしただけでなく、意識の構造を根本的に変えてしまったことを強調したという。（オング 1991『声の文化と文字の文化』166 頁）

オーラルとリテラシーの異文化による意識変革は、現代の研究アプローチ方法や教育方法の認識や変化へのチャレンジ課題ともなる。

二十世紀末で終焉した「南山短大人間関係科の誕生前後約三十年間」の内20年間に表出した竹内の「からだとことば」まどかの「いのちとことば」は、二つの戦後政策（明治維新からの和魂洋才　西欧文明化科学技術化　はいせんからのアメリカンドリーム）物質的精神的二元的豊かさ　ものとこころ　エコノミックアニマルの経済大国 NIPPON において、「人らしさ」「ヒューマニズム」が問題意識に上がっていた。

竹内の「からだ」と「精神」

竹内は「精神（mind）」という語に、もがき、『竹内敏晴の「からだと思想」』によると、

（「精神」を求める賭けにより）竹内『ことばがひらかれるとき』と市川浩『精神としての身体』此の二つが日本の身体論の幕開けと言われた。

精神を肉体と切り離して肉体の上位におく、ヨーロッパの伝統的思考に対するアンチテーゼのんで、私（竹内）が取り立てて精神というのは、別次元の、むしろ実践的な課題としてある・・・「からだ」無自覚な所謂「自然な」生活態は。文化によって形成された慣習に過ぎない。「慣習としてのからだ」に気づき、目覚め、自分を超えてゆく「からだの働き」を、仮りに「精神」と呼ぶのです。

・・・・・精神という日本語はあいまいで、フランス語（個人的　エスプリ）。ドイツ語（ガイスト　ヘーゲル『精神現象学』、「意識ノ経験の学」、グンドルフ『シェイクスピアとドイツ精神』民族的）（和辻哲郎『日本精神史研究』文化を生み出す思想。倫理の研究）「慣習としてのからだ」を超えて、真に人間であることの基盤に立って、自らを長め、息縫うことが、どうしたら可能だろうか。これが、仮りに「精神を求める」と呼んだコトノ、一つの目的です。・・・・（括弧・・・傍線　まどか註）（「4直の思想 p.119」

竹内の「精神」についての記述が、矢萩多聞 2014「竹内さんとの仕事」『偶然の装丁家』に引用文として描かれる。

ここ10年ばかり私（竹内）は「精神」とはなにかと手探りしていた（p.182）

インドを「日本の学校にさようなら　インドが僕の学校」と称しその行き来で生きた少年矢萩は、大人に成って初めて竹内の本の装丁をした時、からだのいきづかいで仕上がることに気づいたという。

上智大学人間学会シンポジウム（箱根強羅）基調講演（司会まどか　学会長 V. ボネット SJ）の竹内は、愛娘の成長と受賞のよろこびを隠しきれず、講師紹介にその受賞報告を伝えきれなかったことが、今でも悔やまれる。また、上智大学人間学会参加の修道者や神学者教職員の場に、竹内の「からだ」は珍しくこわばっているように見受けられた。講演途中で、「あかん」、と一気にその息を自身に向け、話題かテーマか方法か、転換した瞬間があった。

娘（唯）は新東京国立バレー団プリンシパルである。

いやおうなくもからだに押し寄せる「老い」に真っ正面から向き合い、考え、たしかめ、じたばたするエッセイ集『老いへのイニシエーション』に。六〇歳過ぎてからの二度目の結婚、子育てを経て、日々変化する暮しのなかで竹内さんは「精神とは何か」と考える。・・・・

娘（ゆい）さんとは限りない好奇心と体力でぴょんぴょん飛び回っている。その姿を見て、はたと気づくシーンが抜粋されている。

ここ十年ばかり私は「精神」とはなにかと手探りしていた。心と言いかえられ、身体あるいは肉体の対置される用語としてのそれではない。魂とも違う。

（中略）

いっそこの用語を捨てればいいのだが、ふさわしいことばを見つけることができない。私は非力さを嘆いては、また歩くばかりだ。・・・私の生活の中で。「精神」と呼ぶ他ないような体験がくっきり現れて来ることはなかったが、今、早春の坂の半ばで、はっきりと私はそれに出会った、のだ。

（中略）

「おーい！十字路だぞ、ブレーキをかけろ！」私は怒鳴る。キキーッと音がしてゆりがまっ赤な頬を見せて振り返る。

私は声をあげて笑った。私の関知した快活は、「私の」と閉ざされた、うちにある精神に由来するものではない。ゆいの投げかけてくるものだ。精神はゆりとわたしとの間にはしける火花、私がかの女にさしのべる手、速める足取りだった。

精神というものは、自分のからだや自己の内側に宿っているものではなく、他者のからだとの間にある、異なる人物の間に、バチバチッと飛ぶ火花、それが精神であり、いのちそのものだ、という話は、すっと腑に落ちるものだった。（矢萩 2014 p181,182）（傍

線　まどか）

尚、二十二歳の矢萩多聞2002『インド・まるごと多聞典』のオビの推薦文は、詩人谷川俊太郎への勇敢な依頼文から生まれた。「興味があるので、ゲラを全部送ってください。それを読んだうえで推薦文を書きます」差出人は詩人の谷川俊太郎さん。わが目を疑った。小学生のときからのぼくのアイドルだ。（矢萩2002 P134-136）

絶　賛

谷川俊太郎

字を読んでるんだけど
顔が見える、声が聞こえる、
体温を感じる、
自分のその場にいるみたい。
こんなに生き生きした言葉、
久しぶりだ。

ある日、谷川俊太郎の詩「生きる」をとりあげた授業があった。「生きているということ／それは○○」とくり返される部分を応用し、即興で自分の一節をつくる。

僕は「生きているということ／それはいまを生きること」と書いたと思う。（中略）ひとり「生きているということ／それは死ぬこと」教室の真ん中に立ち入ってはいけないブラックホールがぽっかり空いたよう。彼にとって「死」は、僕らの「ボーリング」や「給食のカレー」と同じように身近な言葉だったのかもしれない。（P31）

ニンカンという学科では、「人間関係　関係を創る」という、筆者にとっては非日常的語ことばがニンカンスタッフや学生は平気で使っていた。二十歳前後のニンカン生の思いやことばを出す仕草が、この多聞青年が驚かされたひとりと重なる。「死」「からだ」「いのち」という言葉は、当時はまだ術語 **technical term** としては少数派であった。むしろ宗教的で敬遠されていた。1980 年代シューベルト学長から、南山短大生の印象を廊下の立ち話で尋ねられた時に、とっさに言葉になった両学科のは対照的文化背景であった。

「建前に強い英語科生　本音に強い人間関係科生ニンカン」という印象をコンテント重視　仕上げ業績　と　プロセス重視　気持ちや感情表現　と、受けている教育環境の対照性でもある。

「間」ま間　空ノ間　時ノ間　人ノ間「存在場」

「からだ」は　精神を内包しても　精神をめざしている訳ではない。その精神は、人との「かかわり」「あいだ」という場に表出される。人間関係各論科目名とした竹内「からだとことば」1986 も、まどかの「いのち（生命）とことば（論理）20c 生命科学論」「こころ」等々、平仮名（仮の名前）で志向している　あるもの（リアリティとなづけられているもの）への研究・学究アプローチは、そういうもの（関係性　かかわりノ本質の場面で成るもの）なのだろう。「ことば」はうまれる、「ことばになる」、呼びかけ、呼びかけられるなかで。竹内は呼びかける力の低下、を指摘している。（竹内「4 字かの思想」p53-62）

尚、「ある」ではなく「なる」ものという視点に就いては **Human-beings** ではなく **Human-becomings** として「人らしさ」をとらえてみる、という考え方を既に提示した。（まどか 2001）

鮎澤聡（医療技術）も「場空間」になるという関係性、小野寺功『場としての聖霊』、まどか庸代「まどかソサエティ」にみる「場」「和」の論理の探究からも同結論である。いのちプロジェクト　科学と宗教の対話共同研究を通して、二十一世紀は、学術技術芸術の動向が **holistique** ホリスティックになってきているという報告コメントがある。（フランス大使館科学技術部講演 2024.6. 横浜）

まどか「いのち（生命）ことば（論理）」生命科学と文化

竹内と同期赴任のまどか（自然科学概論）は「人間」を「いのち」と観ることを1980年の社会活動開始時から構想していた。生命科学形成期の化学生として、human Life Scienceを和語「いのちとことば」と表して、生命科学の風土化を通した「和語いのちと和学形成」のニーズを。西欧近代科学・医療・西欧医学による「現代の教育」制度や「人間観」の見直しから提案している。「生命科学は「ひとの」生命の物理化学的方法＋αによる研究領域である。」上智大学生命科学研究所創設(1976)に際し、発足時の青木清（エール大学医学部行動生物学専攻）による定義である。上智大学理工学研究科「生物科学」専攻と命名し、「生命科学」を精密に用心深く区別することを念頭においていた。筆者まどかは。当初、南山短期大学ニンカン人間関係科と上智大学生命科学研究所と東大の科学技術倫理相関大部門などとの研究活動を通して、近代現代心理学と日本の心（温故知新　自文化　沈黙のことば）真理探究心（西洋文明近代化政策　東洋哲学古代伝統文化　日本文明　古風の現代化　調和）敗戦後の平和国家としての国つくり　人つくり　物つくりが、異業種観交流と異文化間交流、違うもの同士の交流的関係（人間関係　国際関係による問題解決やコミュニケーション重視の傾向があった。

大正時代以降の物理学が齎した「科学と人間」「科学と社会」「原子力の平和利用」のテーマは、奇しくも「原子核分裂によるエネルギー研究と原爆被爆者生活を生み出された。アインシュタイン・湯川秀樹・オッペンハイマー・柳瀬陸男（まどかの南山学園への推薦状は、上智大学元学長で生命科学研究所所長柳瀬陸男イエズス会士による。戦後プリンストン大学オッペンハイマー研究室に留学）「一般相対性理論　不確定性理論　粒子説と波動説　量子論等、（物の、人の）存在をめぐる「時間論・空間論・人間論」は、「場の論理」（清水博　医学薬学　分子生物学からの「場」つながり　関係性　環境の論理と共に、「生命論」として生命の捉え方を科学者に問われ続けている。戦争戦後は終わっていないのである。まどかの南山学園へのもう一通の推薦状は。三浦謹一郎（分子生物学と生命科学の推進者　J. ワトソン、F. クリック『遺伝子の分子生物学』訳者　遺伝学会長　東大工学部）である。

物理学も分子生物学も「人間」「人格」の問題を、学問領域として如何に関連させるか模索の時代であった。

まどか「現代科学における個と全体の問題」『人間関係』vol.4）磁場フィールド「場」「宇宙」「人間」の関係的有様在り方あり様　生き方への真摯な態度を問いかけ始めていた。昭和時代、20世紀後半の生命遺伝物質としての「DNA 二重螺旋「構造～機能～生合成」への「人のいのち」をめぐる生命「科学技術と人間社会」のテーマは、Bio-logos を Bio-logy バイオテクノロジー、バイオエシックス生命倫理　自他・利他　共生意識をもたらしている。

一方、1970年代から世紀末最終27期入学生のミレニアム最終卒業まで、ニンカン誕生と人間関係科カリキュラムを担う全スタッフの哲学的基礎は、人間を「関係存在」としてみるという共通意識である。

その人間観と教育観は、学科をコミュニティとして、学習研究共同体と見做していた。顔を合わる　顔の見合える　名前を呼び合える集いの場が、南山短大校舎学舎の一画をなし、南山学園史の風土記憶の風景となる。シモン理事長兼短大第四代学長・宮本副学長時代の南山短大ナンタン・ニンカン人間関係科の様子から「Small is beautiful!」「南山ファミリー」の褒め言葉や励ましの声援が、中庭パテオでの全学生全教育職員対象のコミュニティアワーでのイベントや教員事務関係者家族招待の親睦会・クリスマスパーティ等々の年中行事での挨拶で、皆が微笑んだ。

関わりの生まれる「場」としての学科ニンカン

1976 図書館と体育館～ self reference ニンカン21番絨毯教室～南山大学 D51 多目的教室 2000

ニンカン空間「21番教室～人間関係合同研究室スタミと学科会議の円卓場（台形型ユニットからなる六角形）～隣接事務室兼グループワーク授業道具準備室」「ひとの集い合う」場が、個人研究室・各教室・隣接南山カトリック教会（入学式と卒業式ミサ）南山学園講堂（竹内敏晴作・演出「愛の侵略　マザーテレサとシスターたち」教員学生上演）、元修道院ピオ十一世館と庭等、い

りなか駅からの通称「南短坂」が、女子部校庭の高校生をみる。

その研究の方法や学校教育機関と研究機関、会社社会組織、社会をもたらす時代思潮（その時代の人間意識や民衆大衆人々の考え方）の「関係的相対的補完的もうひとつのオルターナティブ　オーディナリーピープル普通の人々　トップダウンでなくボトムアップ」等の時流や、「管理教育」から「自由　主体的教育」等々、英語コンセプトの日本語は、日本の「からだ」を通していないので、自身の「ことば」に成っていかない。

英語科の英語教育ノ実績や特徴を踏まえつつ、その五年後、

ニンカンの誕生と「ラボラトリーメソッドによる体験学習 Experiential Learning 体験学習」の導入は、高等教育では、日本で初の試みである。カリキュラム化編成は、アメリカのポテンシャリズム（人間の可能性への挑戦）がもたらした行動科学（体験や経験からの理論化）・行動療法（自他の気づきからの行動変容、chance chalenge change の循環的応え方＝体験学習の EIAH 循環過程 Experience-Identify-Analize-Hyposize-next・Experience-）の場として、人と人が出会うグループ形式を教室内外で「人間関係のプロセスを振り返るかかわりの場」を授業として提供した。グループサイズは、「対自己（個人）対人（他者）対組織グループ」により二人～五・六名～十名 T グループ～ 100 名以上の学科学年を超えた全体、等である。学内学外の「人間関係フィールドワーク」は社会のマイノリティ少数派としての身障者施設や特別支援施設・作業所に及んで、社会の中の「自分」を役立てる援助的関わりの体験も「人間関係」を生きて学ぶシステムも学科の特徴となった。

教育学・心理学的・社会学的・哲学的・自然科学や医療医学の基礎論　昭和の第二次世界大戦中後の高校生大学生であったニンカン構成メンバーによる超克著だ津近代脱原発（原子力平和利用と並行して）平衡力（バランス　調和力）は、精神と肉体、spiritual-mental-phisical など二元化に対して物心の平衡力を自身の「からだ」「いのち」である「人間まるごととして捉える統合的・融合的道を実践的に模索し合っていた。それを許し合い、癒され合う教員スタッフつながりノ姿は「学生にも見えていて、先生をニックネームで呼びつつも「先生方は仲が良い」と言われたり、「先生方の学生へのことば遣い丁寧」と感想を漏らす場面があった。つまり学生教師関係も、個人として対等な関係　個の自立責任と自由をスタッフ教員の姿を通して感じていたようであった。

伝統的哲学・社会学・心理学・教育学から体験・学習によるニンカン学際的（interdisciplinary）アプローチの可能性

自己実現としての研究教育共同体 self society 新たな academy post-war post-modernization からパラダイムシフト・社会構成主義の自意識化

クライエント中心のカウンセラー養成、学生中心の教育　人間中心の経済自然との共生　エコノミカルエコロジカル　新たな価値システムを、ニンカンのスタッフは、内外でチャレンジしていた。

ニンカンスタッフを通して、ニンカン文化風土の特徴や研究プロジェクト学生指導や、チームティーチングによるスタッフチーム内でのふりかえりによる研究成果や　人間関係研究法と研究プロジェクト論文の方法が提案されたり、学生と新たに開発する。当初は、毎年約百名強の卒業研究プロジェクト（グループですることがノルマとなっている）の各グループを全スタッフで見守り、質問やニーズに対応する。毎年「卒業研究プロジェクト」や、「人間関係原論」「人間関係トレーニング（T グループ）」「人間関係各論」等々、「人間関係」に焦点化した科目名の他に、各スタッフ出身伝統的学問領域から独自に展開したプログラムもカリキュラム化した。

「間」「己」「自己と他者」「人」「身体　身　心身」「関係」かかわる　からだ　み　いのち　漢字文化と平かな文化　官と民　脱権威社会　など、対自己対人対組織社会さまざまな青野時代の新しいもしくは珍奇なテーマを、オープンに話題にできる環境であった。

毎年の教員合宿（集中学科会議）や内部スタッフ教員と外部ゲスト講師による研究会にて、折々のカリキュラム変革や授業名称の命名を以て、新たな学術芸術の道を模索できるニンカンスタッフ年間構図であった。研究機関としては少ない回数であるが、

授業担当と学内事務と諸会議等、多忙な中での数少ない研究会であった。

まどかソサエティ（家族であって家族でない人同志の集いの場：我が家の家庭名）は、「子は親にとって授かりで大切にしていつかお返しするもの　君はどう思うの　自分の本当にしたいことをしなさい　内省的であれ　自分は自分　人は人と生徒の○○君が言っていたの、すごいわねぇ」等々、父母のひと言ひと言の声で互いの生き方を尊重していた。その連続延長線上にニンカン21番教室と共同研究室がある。初めて21番教室という百畳程の絨毯フロアー（元図書館）に出会ったときは、ここは我が家のまどかソサエティをすればよいのだなと思い、違和感がなかった。母ひとり個人家庭レベルでしていることが、グループ社会レベルになった。従って家庭や学校超えた「集うことで学び合える場としての家庭学科での自己の名称を「まどか」と名乗って着任した。自分とは何かを、学生と同僚と試行錯誤し始めた。新米にはニンカン先輩である二年生が厳しく、スタッフ教員に助けられた。南山短大時代のスタッフと南山大学ニンカンゼミ生からは「まどかさん」「アッセマさん」と呼んで頂けた。（マリアハウスまどか庸代1982-1985）まどかソサエティ（ニンカンまどか庸代1982-2000・心理人間学演習：山口真人・グラバア俊子・アッセマ庸代人間関係ゼミまどかさんーアッセマ先生2003-2017まどかアッセマ庸代　生命科学と文化いのちとことばゼミアッセマさん2017-2019）と、時代意識（その時代の人々の意識）の時流の波間で呼称も変遷しつつ、アイデンティティのこだわりも無くなっていた。

20c ニンカンでのスタッフの思想は個の確立した家庭教育や意識教育のパラダイムシフトをもたらし、self society（メリット学科長の人間関係科構想）への関わりを実践試行錯誤しつつ、生きあいつつ、学術芸術社会を通して社会構成に携わっていた、と言えるのではないだろうか。円環型社会は既に意識化されていたが、行政政策「循環型」社会　時代意識に至るに時間がかかるのである。

「待つしかない、か」（ハイデッカー存在と時間のことば。竹内）の人生は、現在に生きる赤ちゃんから大人まで老人子供　男女老弱問わず意識無意識のうちに体験している。学術の仕事は、30年後百年後もしくは何代もの世代のうちに形になる。

竹内のみたマザー・テレサの「かかわり」「呼びかけ」「愛」

「愛の侵略ーマザー・テレサとシスターたち」

この戯曲は一九九二年九月六日南山学園にて初演された。（4「じか」の思想 P149-272）は、再演のための改訂を加えた未公刊の新版であるー編集部）とある。竹内によるあとがきには、

「マザー・テレサという一人の女性の、人間としての、個性としての、素晴らしさ、その軌跡を描くのではない。彼女において働き給う神の御姿を見るのだ。」

と言い切る。竹内が「神」と呼ぶ存在を語ることは、筆者まどかスタッフ同僚としては希なことであった。

「これはスライド投影と人々の朗唱による劇である。」と編集者註にあるが、南山学園初演の形式は、この朗誦ではなく、各人の「からだとことば」による表出・気づき実演がなされていた。また、あとがきには、竹内による、当時の人間関係科スタッフの名前も挙げられ、謝意を表されている。南山短大30周年（人間関係科25周年）記念事業として、人間関係科の授業と各スタッフに理解ある大橋嘉男第七代学長の熱意ある要請と協力のもと、竹内が全学一体となる台本と演出した。マザーテレサの会のシスターたちも上演に先立ちマザーテレサからの挨拶が紹介された。マザーテレサ訪問された南山学園講堂である。

ニンカンスタッフ全員と学生有志英語科教員有志が登場する。大橋学長はじめ、脚本作成において、氏名配役が記録されている。当時の初演のビデオ、写真等、人間関係科史料として、南山学園に保管されているはずである。（「人間関係科通信」1992 表紙写真）また、上演後日、講演「愛の侵略」記録も、修められており、竹内敏晴「からだの思想」（藤原書店）は、南山学園史料となりうる出版物である。

竹内の「呼びかけ」のレッスンの三段階目（1.言語の誕生～2.「声が私に来た」～3.「呼ばれた」）相手の声がしたとも確かに思われぬうちにすっとからだが振り向いている。一瞬の脱目的なー意識を超えたー出来事なのだ、（P339-343）という。マザー・テレサの神の声、目の前の人に「すっ」とからだが向いてじかにふれている「かかわり」の姿に「神の愛」「神の愛の侵略」を、

竹内は見たのであろうか。

第三部

まどか「いのちとことば」敗戦後の生命科学台頭と和語和学形成

親子教師会社社会　互いに育ち合う場としての家庭・学・職場

まどかソサエティと自己実現としての仕事・ニンカン21番教室へ

まどかソサエティとは、我が家の別名で、父母が結婚後名付けた。大切にしている「家号」である。その思いは、「まどやかに集おうとする、そんな場で　ひとはそだつ」まどかソサエティ。

例えば、南山大学女子学生寮マリアハウスの学生が、日々の生活の中で、学生寮に帰る時に、「寮に帰る」と言わずに「マリア（ハウス）に帰る」という内輪で通ずる会話場面がある。自分の親しい存在の呼称である。子どものころは、「家に帰る」と言わずに「まどかに帰る」と言ったり、思ったりしていた。

まどかソサエティは、父が、名づけた「つどいの場」である。

屋号は、母の実家（植松）では、親戚を屋号で呼び合う習慣があったので、東京出身の父は、その習慣に影響を受けたのかもしれない。

筆者は、子ども心に親を観て巣立ち、小・中・高校・大学・大学院、研究所通いをしつつ、父母の「家庭を超えた人々との集いやひとを大切にする姿をみて育ち、この「まどかソサエティ」から「まどか庸代」と名乗って教育文化の場や作りのニンカンで

は、まどかさんと呼ばれるようになった。

まどかと名乗ることで、まどかなる意味に出会いつつ、円相　禅語にもいずれ出会うことになる。しかし　あくまで「まどかなソサエティ」は戦後の父母の夢であった。

「円同大虚無余無欠（『信心銘』中国禅句）、円かなること大虚と同じ余ストコロ無ク欠クトコロ無し」や円環型社会という構想（まどかアッセマ 2001）にも出会い、自己成長にもつながった。父母の我が子と我が家の命名は人の人生を方向付ける。中庸のみち代、まどかなる心境地は、一生の務めともなる。

我が家の家訓（江戸時代）　我が家の主人夫妻（父と母）が昭和20年代戦後敗戦復興の家庭つくりの途で、日米　世界　日本いろいろな想いをもちつつ「仕事」においては「日本経済経営とヒューマニズム」を強調しつつ会社と人々の復興に努めていた　まどか　はひらかな　ソサエティは英語にしたとのこと。昭和30年代、まだ戦の横浜米軍とその家族は撤退していないので、戦後の日本人とアメリカ人家庭が地域で仲良く交流できることも鑑みて、「まどかソサエティ」と名付けた。日本や国会の動きは、小学生から親子で関心をもつ土地柄だった。

1950年代新婚夫婦六年目で建てた処は、鎌倉市と横浜市の市境で、地主は農家、まだ広大な田畑にぽつりと数軒ある椎郷谷戸で、田んぼのカエルと空の星、小高い山の緑に恵まれ、富士山も通学の道でまだ見えるようなる。北鎌倉の寺も鎌倉の町も、田舎風情であった。農家が大屋さんで、下水道はなく汲取を近所地主さんがする、農家の人達は、少しずつ都会から引っ越してくる人達と子供を通して交流したり、父の会社関係者や母の小学校の先生方や生徒卒業生たちが、クリスマスパーティや曜日別の稽古事等をして集い合うこともしていた。

伊勢湾台風時、まどかソサエティは「人が集うことが供養となる」との思いから家族夫婦とは別棟に、その崖崩れの跡地に素朴な集いの場が建築された。家族を請えたまだ「コミュニティ」という行政主導の施設のない時代にこの若夫婦の内発的真心からの場つくりであった。　伊勢湾台風（1959 昭和 34.9.26-27）の大雨で、神奈川県鎌倉・横浜の市境の山崩れにより少し離れた隣家は

流され、若い夫人が、可愛いやっと歩き始めた坊やとご主人をのこして亡くなった。我が家は無事で、何も知らずに朝目を覚ました時には、小学生の筆者は、台所の窓を開くと、見えるはずのない隣の屋根が土砂で流され浮いているようにみえた。親子は、別側の山を上って、父方の東京の親戚に身を寄せ、父も母も私も仕事や通勤通学を平常通り続けた。避難した時の電車の中で父母が新聞記事を読み、子の私に話した。に。その隣家のニュースがあり、我が家の歴史転換にとっても「一大事の天災」であった。

その隣家一家には、引っ越し当初、母が井戸水を頂いてお世話になっていた。昭和34年両親は、その隣家の跡地を、「人々が集うことも供養になる」という憶い動機を以て「人々の集いの場」となった。まどかソサエティは戦後米国兵を電車や居留地区でまだ見かける頃の多い中、ソサエティと、英語片仮名にしたという。日米のことは民間の人々のテーマであった。

ニンカン21番教室の半分程のフロアーと和室と台所で（バレーやダンス、能）質素なトタンつくりの、我が家の家族とは別棟にすることで、人々の出入しやすい「公」けの傾向が、母には育まれていた。

父は工業化経済社会とヒューマニズムを、母は学校学級教育を通して「個性」ひとりひとりに道理がある、というおもいと反骨精神のバランスを生涯もちつつ、教職離職後五十から九十五歳まで人々と我が子の教育の現役意識で、チャリティ茶会や稽古茶事茶会を勤めた。そのような場を、父は「まどかソサエティ」と名付けた。母は土曜日は、学校ヲ終えて近くに手芸などの手作りの店を開き、若い女性たちがお手伝いしていた。手芸や茶道や粘土創りお琴等、手先を使うことは、小学校や特殊学級クラスの子どもたちに役立てていた。

母は、独身時代から仕事熱心で、戦中は疎開の子を引き受ける小学校の先生で、駿東郡原（白隠和尚誕生地、現在沼津市原）出身　静岡県富士山の裾野にある岩下神父の温情舎（らいの人を養生）や、後の不二聖心女学院のシスターたちとの教育職に付いたが、すぐに静岡県沼津市立第一小学校の先生に転職し、堤校長らと鈴木大拙講演依頼や研究授業担当やユニークな学芸会・卒業式典など行事催事にも力を発揮していたと聴く。7.17空襲の時には、原の自宅から沼津の小学校校庭まで隣町から何里何km か急

いで駆けつけた、という。駿河の原宿の旧道を歩く「熱き八千代せんせい」の姿を物語った卒業生は、既に90歳近く、原町の「帯笑園」保存会を維持しつつ、「白隠ミュジアム」設立のビジョンを朝日新聞に投稿していた。7.17会という教職員と当時の学童たちとの同窓会が校長の無くなるまで続いて、参加していた。

娘（筆者まどか）は、親の方針で公立小学校に通い、地域家族を知り、ミッションスクールの中学・高等学校学に進学した。母は、公立学校との違いを整然とした秩序の職員室やシスターたちの人を包見込む大きな丁寧な振舞にショックを受けて、公立学校職を40代で退職し、数年は迷い子のように夫にいつも相談していたようだ、「お父さん、私はどうしたらいいかしら?·?·と。」多芸無芸と自称して、お茶を教えたり、手芸、ダンス、能、絵画ノ先生を招いて　米国居留地のアメリカンファミリーのお料理を紹介して頂いたり、生かして折々のパーティに依頼したり、東北遠方故郷を離れた働く青年を家に招いたり、ボランティアグループ愛のパトロールで身障者施設くるみ学園の小学生から老人までの学校や施設に花を運んだり・・いとまがなかった。

「お父さん、お茶の学校に二年間毎週通ってもいい?!」、と本腰になったのは市井の「お茶の先生」茶道人となった。九十五歳まで現役としてひとり身を粉にして茶事稽古修道させていただいた。まどかソサエティという個人の家庭の思いは個の自律した女性が未亡人となっても続けた家庭つくりと社会への希望と反骨のいきづかいで娘を見守っていた。「戦争を経験していたのだから、何があっても平気」が、大変なときの一声だった。天寿全う、親子もひととき、供養は一生続く。ひと同志で育ち合う場、まどかはニンカン21でも育った。

ちちははあっての「まどかソサエティ」の生き方は、ひたすら、「素」と戦争体験から忘れない「日本の貧しさと心の自由」「個人としての自由　と相手への洞察」であった。一方、公立の小学校に、「特殊学級」を創設担当し、数年は担当していた。娘が小学1年生の頃は、その学級の一年生から六年の生徒たちと一緒に粘度工作や、スイカを食べたりし、家庭訪問も二つの家庭とは、私も同伴していた。今で言う子育てし乍らの「働く女性」「夫婦別姓」「コミュニティ」「地域」という行政ことばより二三十年早い実践的先駆けであった。通勤は、新居から東京方面まで、母とのラッシュの通勤電車の往復は、自分は負担感はなかったが、小学二年生からは近くの公立学校に転校した。

父は東京出身で、大正ロマンの生まれ　関東大震災戦災戦後復興ものつくりのレコード工業にも携わり、戦後の日本を音楽で潤したい、という思いがあった。子供の教育のために北鎌倉方面に　夫婦で新居を構えた。

仕事は横浜川崎京浜工業地帯と、東京永田町、日比谷、マッカーサーGHQに占拠された横浜ニューグランド　戦後の工業化時流を得て、京浜工業地帯など、東京横浜地域で会社役員として、戦後の日本の復興に務めていた。私、子供の目にも勤勉であった。父は経済作家の城山三郎を讀み、子ども心に日曜日の父娘の会話で政界財界にも関心があった。司馬遼太郎、吉川英治等同年輩の日本分析を読んでいた。親鸞上人の勉強会も東京実家のお寺さんと若き頃は立ち上げていた。参謀役となる穏やかな優しいひとだった。喜寿で逝った父は、「優しい」という漢字は、人を憂うと書くんだね、と参謀役のころ何気なくの一言に、人を心得ている人だと子ども心に思った。

「和ノ人」「和学」の可能性は、応用化学出身の日本のビジネス文化人の臨終から生まれたレクイエムである。（まどか1995「親のいのちを与ってI国際・社会・変革」）

母、八千代は、駿東郡原（現在の静岡県）の出身で、校長の長女で、女子高等専門学校から小学校の教師になる。母の実家の本家は、『人間の運命』著者、芹沢光治良(1896-1993)が書生時代を過ごしたと聴く。

母の祖父（筆者まどかの曾祖父）が、山出半次郎は、富士山麓の御殿場農学校校長で、牧野博士により（緑桜の発見に関わり学術名が遺る）・東大小石川植物園に納められている。

母の父、植松金次郎は、山出半次郎の息子で原の植松家平野屋一人娘に婿入り、小学校校長であった。二宮金次郎倣い、ペスタロッチと言われた。農業による地域つくりは校長の仕事の一貫である。また、戦時中は、学校に置かれる天皇の写真を守ることも校長職務であり、防空壕でそれを守る姿も娘の立場から母は語っていた。八千代（1922-2017）の命名は「君が代は千代に八千代にさざれ石の巌となりて・・」（古今和歌集）からか、そのような命であった。

農業・農村・漁業など産業や家庭経済による家族と学校と教師のつながりの頻繁な時代と土地柄であった。

曾祖父山出半次郎の沼津兵学校附属小学校と教育変革の脈

この山出半次郎の受けた教育は、徳川藩から「静岡県沼津兵学校附属小学校」卒業生（大野虎雄昭和 14.5.30「沼津兵学校と其人材・附属小学校並沼津病院」）で、その後御殿場農学校校長であり、サクラや植物の研究者である。

不二聖心女子学の「校長室から　フジザクラ」『フィールド日記』2013.5.17

担当蒔苗教頭によると、「緑萼桜　リョクガクサクラ　みどりサクラ yamadei（富士桜の一種）発見者当時御殿場農学校（現在の御殿場高校）高沢二郎教諭発見。その校長山出半次郎が牧野富太郎博士に送付し命名される yamadei1916 などの記述もある。牧野博士は、大学枠を超えた植物研究者として知られる。「学術」の本質と学校社会、教育システムなど「形式と本質」を問う牧野博士の「近代植物学」「西洋の学術体系」と「日本の植物　薬草　江戸の「本草学」の見直「西洋医学と東洋医療（医学と称することは認められていない）、和・漢方、和方・和法・日本の方法」が、問われ提案されるテーマが、郷土史研究と郷土のまちおこし、教育文化活動を通しての日本のあり方への実践的チャレンジは、筆者まどかにおいては母方の家系である。

日本の教育のポストモダン、パラダイムシフト、イノベーションとしての「家庭個人レベルでは「まどかソサエティによる SELF SOCIETY 大学（短大、高等教育）レベルでの SELF SOCIETY への HUMAN CENTERED APPROACH が、江戸時代末明治維新の戦後近代化、昭和時代の第二次世界大戦敗戦国日本の英米化、アジア化、ヨーロッパ化、いずれはアフリカアジア AA 地域によらずとも、日本の「日本らしさ」「人らしさ」の探究方法や教育、その人らしさの育つ環境や場所つくりは、多種多様にして、自己の内なるバランス平衡感覚をもたらす「体験や経験を」積む、歴史やプロセスが大切である。「和法」への意識化も、西洋東洋など外来に向けるだけでなく、模索し続ける仕掛けや、自文化への気づきや学習も必要である。

自分の家族、自分の地域郷土、自文化への意識化教育は、西欧近代化や近代科学的志向と同時に、育まれていく。

（「徳川藩の幕末後明治の御一新による幕臣の子どもたちの新時代への教育　富士山麓や、駿東郡の植物園（植松家　皇室やオラン

ダ医者シーボルト博士も薬草研究で立寄る植松家の帯笑園として現存している。母方本家）にも出入したものと思われる。牧野博士の帯笑園への足取りの記録は現時点では不詳である。山出半次郎が御殿場農業学校長として牧野博士にサクラの新種を届け出、緑桜、学名 Cerasus incisavar. Incise f. yamadei を受けた。

帯笑園はサクラソウの保存が有名で、研究保存と定期的に一般公開されている。

（「帯笑園」山出半次郎の孫、植松善夫（母の弟）は帯笑園保存会初代会長）。

尚、シーボルトは、蘭学者として江戸幕府の往還時に面会を求めて、長崎に蘭学のために遊学、師水谷豊文亡き後三回忌追善本草会を開催し、名古屋本草学の中心人物となり、（木下、大場秀章「伊藤圭介」東京大学総合研究博物館 https://umdb.um.u-tokyo.ac.jp 202408）洋学の普及、学術の近代化を推進した。

尾張藩の本草学者・蘭学から明治の洋学伊藤圭介（1803-1901）は、東京帝国大学植物学教室員外教授として招かれている。

一方、静岡県沼津兵学校（頭取　西周）は、徳川藩幕臣の教育の近代化などの、「教育変革」の一つチャレンジのモデルを示すもので、「附属小学校　中学　大学」西洋モデルと東洋モデルの選択や現実的選択が、日本の諸藩、他の県に影響を齎した。榊下十助幕臣の子、榊（さかきゆたか 1823-1894　陸地測量術教授）は山出半次郎の実兄である。

橋尾四郎 1969「沼津兵学校とその附属小学校ー日本近代教育の原型ー」によると、科研代表：小川晴久 1990「東アジアの学問世界「贅語」の総合研究」

西周（沼津兵学校頭取）は、東洋的＝大学・小学と、西欧の大中小学　を区別し、一元的を目指した。明治元年当初、小学校構想はなく、ひとつの大学という構想を抱いていた。（中略）

西欧と東洋（的考え方）

そこでの新しさは、

・1「兵学校と附属小学校」
・2　教師育成の想定（士官とつながり）
・3　女子教育

「古に復し」と「実用」とが、近代陸軍学校構想と教師の専門性は曖昧乍ら、も、開明的近代的方向をもつ。（p26）

橋尾四郎（1939 生）広島大学出身。中国哲学福島大学助教授。　山口大学教育学部教授を経る。日本の方向付ける徳川藩が、伝統的東洋化によるか西欧化によるか、という東西二択の視点で示唆するこの研究は、名古屋大学科学研究費補助金による。昭和41/42 年度結城陸郎教授共同研究「東海地方における教育の史的展開とその近代化過程の基礎的研究」である。

西周は、心理学　化学　など学問分野の名称の和訳（日本語訳）をして、日本の大学の制度及び学問領域の西欧近代化をもたらし、整備した中心的人物である。

現代の学校制度は、戦後6・3・3制及び4年制大学（短大）・医薬系6年制・修士課博士課程2年修士号3年博士号である。

1970 年代60年代、ニンカンスタッフとなるまどかの大学生時代は、「近代化」「アメリカナイズ」「物質文明化」「ものの豊かさからこころの豊かさへ」と日本の「近代化」「物質化」が問われていた。「超克日本」「超近代」「脱近代」「脱原発」「脱権威主義」は、60年安保70年安保闘争時代、小学校から大学生まで、国会や大学紛争も、身近なテーマであった。

更に、橋尾四郎 1966「静岡藩における近代学校の成立過程その2ー大学規則並中小学規則との関連を中心としてー」によると、「徳川家兵学校附属小学校掟書」（静岡藩小学校掟書（新掟書）明治3年

・1「大中小」（西欧）系列につながる上級への進学予想の小学校設置＝藩の学校制度の「大小」（東洋的）体制より「中学小学」体制への改組。すなわち

静岡学問所「幼年組」・沼津兵学校「附小」の「小学」への改組は、現象的には「大小二層の教育体制」（中国古代の伝統的東洋的学校制度）が「三層の教育体制」（近代的学校制度）への伏線・母胎であった。明治維新政策下であっても、その後伝統に戻る予

兆ともなり、影山昇「徳川藩における近代学校の指摘考察」を誤認とした。

・2　二元的分裂の是認＝上級（中学＝学問所・兵学校）進学の為の学問所附設の「小学校所」・兵学校「附小」と、無級稽古人対象の各所「小学校」との静岡藩的区別の実現。

・3　教科編成における二元的分裂＝「無級稽古人（士族でも上級進学を志ざ　さないもの、および平民子弟）の学習における「読書算術」への限定途上旧進学を予想するものへの皇朝雑史類（皇朝学）の新設。

と、要点が列挙されている。

日本の近代化モデルとしての学校制度は

明治時代は、当初は西洋化をとりいれ刷新を見せつつも、徐々に明治半ばには伝統的東洋化へと現実的にもどる地域もあった。また、西周頭取は、その時代の西欧現代の概念を翻訳和訳しつつ、学問領域の名称（哲学、心理学、化学等）や研究方法を漢字和訳して、外来の価値観や人間観をとりいれていくことで、20世紀第2次世界大戦敗戦後の日米関係安定化への戦後処理と欧米中心の国際化

日本の西欧世界への理解努力と留学制度、ホームステイなどの人的交流による平和教育は各学問領域に、日本という非西欧文化園の西欧化教育は普及している。

即ち、明治時代の近代化という政策の名の下に、官民、老若男女　総じて、教育変革や教育のチャレンジがあった。その延長線上に、大正ロマンと昭和時代の西欧近代化・民主体の個の尊重と組織社会とのバランス、公私、国家と個人。全体とひとり、グループ集団と自己完結型ひとり等、様々な人々との出合いを通した「人間尊重と自己尊重」が模索されている。昭和時代の敗戦後の夫婦（筆者の両親）の静かに心していた「まどかソサエティ」（家庭家族人々の「つどいの場」としての共同体チャレンジ）、ニンカン（場としての教育研究共同体 leaning community チャレンジ）であり、人生たちであった。まどかと名乗る、もしくは、その名を呼んで頂き乍ら「まどかという思想思索」がニンカンのおかげで育った。「まどやかに集おうとする、そのような思いの場で、人は育つ」という父自身は、まどやかな「和の人」で、学問・哲学を好みつつ、戦後復興の経営経済社会とヒューマニズムを

心して、家族にあっては穏やかな人であった。母は、戦前も戦後も「自分は変わらなかった」「自分は自分だった」といえるひとで、自由自立を尊重しつつ、人の平等や所謂世間的に尊重されないひとびと、出会う人の成長を考える人だった。

敗戦後の日本人が、精神的に柱を失うことや、戦後の日本が西洋の二元的志向に支配されることを懸念した仏教研究者、鈴木大拙は、終戦前に『日本的霊性』（1944）を発表し、日本人には、精神と物質（Mind/Matter）だけでない、その二つをつなげる日本的霊性があることを提示した。妙好人の阿弥陀さんの名への親しみある呼びかけの姿が描かれている。鎌倉仏教、日本仏教の風土の力のあることも思い起こしている。戦中戦後小学校教員であった母は、大拙を堤校長とともに招き、聴講したときく。

「和学」和語いのちによる生命科学領域再形成は父の死（まどか 1995）の経験とレクイエムから、現代医学医術、科学的思考の現代（その時代の人々の意識）的限界、すなわち、学術のあり方への問題意識や、いのちの捉え方から気づき、生まれた。親のいのちあってのひとのいのち、一生である。

生命科学と文化を踏まえた和学「いのちとことば」は、日本人の身に似合った医療や人の生き方死に方生かされ方探究である。心のことば遣いに平かなことばを響かせることによる自他の認識法である。

まどかソサエティ　和の死生観　和学形成と社会構成主義

生命科学からの和学形成・パラダイムシフトと社会再構築

re-construction of 学術芸術ソサエティの再構成への試みは、まどかのニンカンライフにおいて如何になされていたか。関係的真理探究、「自他を知る」「問いかけとその答えの所在（真理の在）」は、一期一会のその場でその時その相手との（対象との一体）間に生まれ消える。一生に一回という気づき体験（悟り）ということもある。

筆者まどかは、20世紀末、価値観の「枠組はずし」、ことばや論理づけの「モード変換」が「生命」から「いのち」という和語変換によって、生命論仮説や生命科学の範疇を拡張できると考案していた。

特に医療現場に携わる職業人（医師　看護士　経営者）や、患者家族、家族の死や看取りの対話場面のシュミレーションや経験の分かち合い、素直な自己表現トレーニングと名称したAssertiveness Training, イメージワーク等々、学生社会人対象に「生命論ワーク」プログラムにより、グループや他者の中で、自分の気づきや内的自芯を実感する場つくりを、ニンカンの授業「いのちとことば」とニンカン研究センター講座で呈していた。（まどか「言相と幻相　身を以ての生命の認識法」南山短大紀要）」

Experiential Learning 体験学習による生命論・日本語日本人の心身に見合う医学と「ひとの生命」科学（生と死・再生）の領域つくりを再構築しようとしていた。そのためには。理系文系のみならず、生命科学と倫理・神学の対話や、学問としての科学と宗教の接点等、学術の多様なジャンルの共通性とその課題、を意識していた。

生命科学や医学や医者による基礎研究法の基盤に成る物理化学的・分子（漁師）生物学的方法に、もう一つの+アルファを加えようとしていたまどか（ニンカン教育研究共同体時代）としては、科学者共同体の発想転換に期待した。

科学哲学概念であるT. クーン(1974)の科学者共同体における「科学革命」というパラダイムとパラダイムシフトは、西欧社会の人々に起きた大航海時代の「宗教革命」と併せて、人間の西洋の人々が経験した知と知恵、生活様式の転換点や「人間の学術芸術文化明の潮流を把握する助けとなっていた。

坂井直樹コンセプター（日産 BI デザイン）は、筆者まどかのニンカンでのコンセプトに「際レス」と命名した。（東京 TV　次世代インタビュー番組　ニンカン21社会人講座取材）

また、○円同大虚無欠無余（まどかなること大虚と同じ欠くところ無く余すところ無し）信心銘（真理とは何かを説く）「禅句」や十牛図の「円相」を連想されるが、筆者の呼称で仕事した意図は「まどか」はまどか思想を教えるトップダウン型の意図は全くなく、その場でうまれる「まどか」ただ一点だけその人の思い方感じ方の名称である。そして、まどやかに集うおうとする思いは、一瞬にして、円やかにはなり得ない集いの場でもある。しかし、それでも、皆さん円やかにと、繰り返す営みが、個と個の自由を尊重したつどいやニンカンでのグループであった。まどかという音そのものが、円かになる。和語の響きの力はある。

K.I. ガーゲン（1994 原著、2004 邦訳）は、T. クーンの合理主義の科学哲学検討と批判を踏まえて、心理学から社会構成主義を提言した。

「ここ二三十年、心理学は「知識は個人の頭の中にある」という西洋文化において中心的観念をめぐって、一大変革に入りつつある。」という。個人の心（ないし、頭）心理学における「頭の中の知識」という観念の行き詰まりを、心理学における理論的転換（心理学の理論・メタ理論・方法論の三種類の言説を中核的命題群 (intelligibility nucleus) という概念を用いて考察している。

心理学からの様々なセラピー、プロセス志向型のものがたり　プロセス志向型の言語化や、自己のものがたり　ナラティブセラピー・・・・行動主義理論から認知主義理論へと大きく転換した。しかし認知理論は、「頭の中の知識」を前提としている。

「科学者コミュニティがコミュニティであるのは、記述や説明のための言語を共有しているからである。・・・科学者共同体の言説的意味を考察することによって、パラダイムシフトに就いての理解を深めることができるはずだ。」（P.27-28）

（前略）従って、述べてきたような経験主義や「経験主義―合理主義」の二分法に基づく批判、すなわち、経験主義に伝統的に対立する観点―合理主義―から導出される批判である。

周知のように、西洋における「知ること」についての諸理論の歴史は、人間の知識が経験的な入力によって創られるとする説明と、精神こそが知識の源泉であるとする説明との間を、振り子のように往復してきた。経験主義の伝統を組む哲学者―ロック、ヒューム、ミルーによれば、個人の知識は大部分、環境の経験から形成されるものである。個人が知識を得るのは、観察を通じてであって、現実世界との経験的接触なしには、知っていると言えることはほとんどない、とされる。

他方、合理主義の伝統をくむ哲学者＝スピノザ、デカルト、カントーによれば、人間の心に固有の性質、生来の理性＝世界を編制する能力がなければ、知識を所有していると信じることなどできない、とされる。

論理実証主義の科学哲学は、伝統的な経験主義を改良し、二十世紀の科学哲学を作り上げた。ハンソン (Hanson,1958) やクーン (Kuhn,1962)ha, 合理主義の伝統に基づいたものである。・・・・

「クーンによれば、パラダイムシフトはゲシュタルトシフトにと似ている。

それはデータによってではなく、固有の心的傾向によって生じる。」

社会構成主義の提言をする。経験主義でもなく、合理主義でもなく、メタのレベルにおける「知識は個人の頭の中にある」第三の批判は、全く次元を異にする立場からの批判で、両者をまとめて一極においたときに、其の対極と成るような立場からの批判である。イデオロギー批判を他の知的批判と共に社会的批判を統合し「知ること」に就いての新たな理論ー社会構成主義ーを呈示することになる。・・・知識が共同的関係の産物であることを主張する。（同 P.28-29）

知るということは、関係的に生まれる、間、相手（他者）や社会との間にあるという立場である。

「意味は関係の中で生まれる」（同 P.351）

関係性が調整され（秩序づけられ）て、初めて存在論（何が存在するか）も確立される。（同 P.359）

ニンカン人間関係科体制が 2000 年度終焉を迎え、あらためて心理学からの西洋哲学と科学哲学の経験主義・合理主義批判からの「社会構築主義」「関係論的」メタ理論（社会構築主義の提言）が、ニンカン（関係易人間存在への哲学的・心理学的・社会学的・教育学的実践的人間的 learning-Community 創りと理論化）の「人間関係」の知り方や研究アプローチ法そのものが、20 世紀後半の戦後の近代「科学」化「科学的知的中心教育」に

「人間関係」学＋α、「ひとの生命現象への物理・化学的アプローチ＋α の「α をもたらしていたのではないか。即ち、「間に知がうまれる」という際や境界領域に答えが生まれる」「学際」「国際」「人際」という意識である。

Fig.（まどか 2024）

経験主義	合理主義
一体験一過性	データ再現性と一般性
宗教神秘体験	自然科学的証明
個人的体験	集団的科学者共同体の認知

閉鎖系自己開示　　閉鎖系パラダイム内批判からのシフト
関係システム（対話）　関係相対的真理探究（場）
価値　意味体系言葉　没価値　記号言語
宗教体験（一過性）　科学実験（再現性あり）
証明不可（信　非科学的）証明可（知　論理的思考　科学的）
中世前近代学　　西欧型近代（分科）学

学際領域を形成すること　境界領域のキーコンセプトは何か
これがニンカン人間関係科スタッフの学術的活動の共通意識にあった

まどかは人間関係研究センター研究員としての自覚から、学際領域形成、もしくは人間関係科の学術的位置づけとして「国際学際学会」参加や、生命科学基礎論という切り口で「生命科学基礎論と和学形成に至る和語いのちによることば形成に至って居る。故山口真人（社会心理学）は「学際領域を目指している事のよき理解者で21世紀へのニンカン発展的解消と新学科（教育学部との合併）の際の教員職員への配慮をしていた。

ある学科や研究機関が、学際領域形成や和学形成に至るためには、ニンカンスタッフは研究者として、三相の研究ニーズを担うと考える。その三相とは、

1自分の出身領域の科学的方法（伝統的領域の方法論）ニンカンのベースは人間関係の「哲学　心理＋社会学　教育学」的基礎とカリキュラム分類されていた。筆者まどかは自然科学・科学基礎論出身（哲学的基礎チーム）
2メタ理論　各領域の特科学哲学
3新たな方法論の開発　まどか和語いのちによるセルフケアと看取りのケア

更に、その学科や研究機関の教育実践現場、例えば、「ニンカン」（人間関係をテーマとする学科であり、同時に Learning =Academic Community 教育研究学術共同体 Learning Community = Academic Community = 科学者共同体の Laboratory Community）をめざすニンカンとするならば、

4 教育現場

4-1（ニンカン学生 client centered therapy/education）の実践

これは「体験学習によるグループファシリテーション（個も全体も、自他の生きる）ラボラトリーメソッドによる人間関係トレーニン（Tグループ）合宿集中授業体験学習グループセラピーを内部スタッフとして学生理解と自己理解を深める。

（ニンカン中村は、その後これをコア科目と称し、他の体験学習や種々のセラピーや新たな方法論探究を周辺科目と位置づけた。（木村は　行動科学研究会が翻訳した原典を南山大学心理人間学科に寄贈した。これは研究者としての学科財産であり、これにより、筆者まどかは「体験学習」と「Tグループ、体験学習型ワークショップ　実習の」の区別が明確になった。原典にあたること、その人物に合うことは、研究のマナー（研究倫理）であるが、木村はニンカンの研究としての体験学習を尊重し、且つ伝統的ユング心理学と箱庭療法と貫いた。

4-2 体験学習の実習作成と実施による伝統領域（ex. 体験学習によるユング心理学 哲学読書開設後のグループディスカッションも体験型学習等、）

従って、人間関係科ニンカンスタッフは

更なる研究活動として、前述の 1.2.3 を新たなジャンルとして「人間関係」という領域の「人間関係（学）形成」を目標とすると、

1. 人間関係論を体験学習法によって、仮説化し、実践する　人間関係の普及

2．人間関係学科のメタファーを言語化するニンカンとは何か論（人間関係哲学）
3．人間関係研究のもう一つの方法（筆者は、「学際」領域形成としたが、ニンカン内部での研究交流するには、皆忙し過ぎ、「人間関係原論」4人のチームティーチング2年間のスタミを有効に生かそうとすることが、現実的であった。一例として、
（竹内　中野　グラバア「人間関係原論　かかわる　変わる　かえる」
（山口　伊藤　大森　まどか 1999「人間関係原論わく論とも論あい論」
山口は、学際領域形成自体にというよりもニンカンのスタッフの自己実現を配慮しているように見えた。Leaning Community としての学科つくりの意志からからである。

人間関係、関係的は、20世紀の新たな領域であり、生命科学も然りである。従って。ニンカンスタッフは伝統的近代科学的方法による学問領域の様々な矛盾や違和感を経験して居ても、若手研究者は、キャリアのためにも同じ方法と伝統的方法、学界内の共通言語・専門用語から離脱しにくい。自分もゲノム研究システムの出来上がっている国立の実験科学ではない方法探究となった。
自分も含めて、「ニンカン」の新たな教育チャレンジは、「人間関係学」専門家

筆者まどかの場合は、生命科学の方法探究＋α に「科学と宗教の対話、バイオエシックス　日本人の身に合う医療医学　死と生を大学カリキュラムとして位置づける包括的死生論　看取りや生活場面での和語日本語のことば遣い素直な自己表現トレーニング「いのちとことば「生命科学と文化」等、対象者やチャンスの許される範囲で取組み、「西欧型非西欧諸国の医療文化と西欧近代科学の補完的医療」「自然科学人文科学社会科学の共同研究のテーマ設定」「科学と非科学の共同研究」「形而上学と形而下学」の対話は、あり得るだろうと、期待している。神学者は、神学のメタファー理論は、何処を拠り所とするか、カトリック倫理神学までは生命倫理で接点を医療現場からもちうるが、神学者との議論まで、人生の時間が許されるならば、「形而上学」が、神学において、どのような位置づけに成るのか、現代の形而上下学以外の関係的な神学構造があるのか、神学部を一般に開放して学べる

南山故に、ここに問題意識を記す。

自然学　人間学　時間学　空間学　なかなかすぐには学術的議論や質問に至らなかった。「生命科学と倫理神学　人格論」は、医学からも医療からも家族家庭の人間らしい生き方死に方に至る。

和学形成　その時代の学術モード（コンテンポラリーアート）変換
本質本音本物で居合おうとする本気との出合い～
ワークショップ「いのち　いのり　医の理」

篠原資明（1950 生　哲学・美学　京都大学教授）は、「神秘系機械系　アビラのテレサと印度のテレサ」『ベルグソンー〈あいだ〉の哲学の視点から』(2006) にて独自の自由な発想を展開し、中世と現代の本質的思潮を繋いだ。正にまどかの行っていることである。芸術哲学と宗教哲学に関わるものとして一冊づつ、ベルグソン哲学と他の哲学との違いを明確にしつつ発想したもの。本書はいわば原点（原典？）への恩返しのような面をもつ (p195)

トーマスクーンから大聖テレジアとマリアテレサを先例として、科学革命から神秘主義否定の科学史と科学思想史迄、医者ベルグソンの思想を通して展開した。俯瞰の卓越を感じさせる編集である。

筆者まどかは、以下、和学へとモード転換した先例を挙げて、日本の生命医療・医学教育の中に、「いのちとことば」「和語（平かなの音の響きによる自他のいのちへの感受性と意識）による生命現象領域の学術」を、生命科学からの和学 le japonologie、「日本学としてのライフサイエンスの可能性」を提唱する。「科学化と和学化」の意識の時流、思潮の展開である。

はじめは科学者共同体や医者医療者への働きかけと、ニンカン、人間関係研究センター講座での「生命論 work いのちとことば」（先端医療と和学研究）の患者家族間を対象としていた。

和語は　声明　リズム　音韻から成る和歌　やまさくらのいのちで表現され日本のアカデミックな当時の学問へのチャレンジの歴

史がある。

先行研究は、先人の勇気といきづかいと姿（行動）にある。

平安時代の空海の仏教留学真言密教とまちつくり　その時代の大学空間つくり（高野山）と大学テキストとしての密教曼荼羅立体曼荼羅による宇宙論を提示した。般若心経の教えを平かなの和歌いろは歌で伝える。

と仮説し、史料や体験学習による「いろはワーク」を実施した。（まどか『人間関係』）

仏説般若心経

観自在菩薩　行深般若波羅密多時照見五蘊皆空度一切苦厄
舎利子色不異空　（見えるもの見えないもの　形と質）
色即是空　（心身一如　東洋仏教一元論 cf. 西洋二元論）
空即是色
（中略）
無眼耳鼻舌身意　（無の思想）
無色聲香味触法　（ニンカン G. 俊子ボディワーク五感界）
無眼界乃至無意識界
無老死亦無老死尽（ニンカンまどか女性論　生産看死）
（中略）
心無ケゲ無ケゲ故（ニンカン津村プロセス界）

無有恐怖遠離一切顛倒（ニンカンまどかパラダイム発想転換界）
夢想究竟涅槃三世諸仏（聖教職者界この世であの世を生きる）
依般若波羅密多故得
（中略）
故知般若波羅波羅蜜多
能除一切苦　真実不虚　故説般若波羅密多　呪即説呪曰
ギャテイギャテイ波羅ギャテイ波羅僧ギャテイ菩提薩婆訶
般若心経

般若心経からの和学
空海いろは唄（まどかアッセマ 2001 空海秘鍵「ん」・2017〜「印相瞑想法」）
色はにほへど
散りぬるを
わが世誰そ常なら無
有為の奥山今日超えて浅き夢見し酔ひもせず　ん

白隠和尚に見る和学
白隠座禅和讃（表1　和法分析）
日本音　日本人の身を通した悟りのことばとして
江戸時代の白隠禅僧による坐禅和讃の作成

衆生本来佛なり　この身即ち佛なり（即身成仏）
坐禅の妙味　仏法僧を和語五七調の歌で唱和しやすくなっている。
父十三回忌追善茶会で縁あって自ずと唱えるようになった。

白隠和尚生誕地と住職を務めた松蔭寺は、母実家のそばに位置し、参ずる。歴史の富士山と並んで高名な禅僧駿河国徳川時代の名僧と成っている。和讃は、鎌倉仏教の禅宗臨済宗白隠派として、独自の修行法をもつことに成る。

本居宣長　医者国学者古事記伝からの和学
しきしまの　やまとこころを　ひととわは
　あさひににほう　やまざくらかな
敷島の大和心をひと問わは　朝日に匂うやまざくらかな
（まどかアッセマ 2009「江戸の多文化共生」）

〈資料1〉
白隠禅師座禅和讃と和法分析による諳誦（まどかアッセマ庸代 2020
和法分析一：『音韻』を踏む　七五調

01衆生本来仏成り　　水と氷の如くにて
02水を離れて氷無く　　衆生の外に仏無し
03衆生の近き（を）知らずして　遠く求める儚さよ
04譬えば水の中に居て　　喝を叫ぶが如く成り

05長者の家の子と成りて　貧里に迷う（に）異ならず
06六趣輪廻の因縁は　己の愚痴の闇路成り
07闇路に闇路（を）踏みそえて　何時しか生死（を）離れたり
08夫れ摩訶衍の禅定は　称嘆するに余りあり
09布施や持戒の諸波羅蜜　念仏懺悔修業等
10其の品多き諸善行　皆此の中に帰する成り
11一坐の功を成す人も　つみし無量のつみ滅ぶ
12悪趣何処に在りぬべき　浄土即ち遠からず
13辱くも此の法を　一度耳にふるる時
14賛嘆随喜する人は　福多きこと限り無し
15況んや自（ら）回向して　直に自性を証すれば
16自性即ち無性にて　既に戯論を離れたり
17因果一如の門ひらけ　無二無三の（　）道直し
18無相の相（を）相として　行くも帰るも余所成らず
19無念の念を念として　謳うも舞うも法の声
20三昧無礙の空ひろく　四智円明の月冴え無
21此の時何を（か）求むべき　寂滅現前するゆえに
22当処即ち蓮華国　此の身即ち仏成り

和法分析二：言葉の重複の韻を踏む　覚え易さ諳誦に導く　自然調和へ

・一（坐）（度）（如）（無）二（無）三　四（智）　六（趣）
・求む（遠く）（何をか）
・即ち（蓮華国）（仏成り）（自性　無性）（浄土　不遠）
・如く（水　氷）
・離れ（水　氷）（生死）（戯論）
・其の（品）夫れ（摩訶衍の禅定）
・此の（中）（法）（時）（身）
・遠く（浄土）
・ひらけ（門　開く）　ひろく（空　広く）
・衆生（本来）（外）（近き）（遠く）
・趣（六）（悪）
・無（仏）（氷）（はかなさ）（辱く）（限り）（無性）（二）（三）（相）（念）（円明月冴えん無）
・中（水）（此の）
・不（知らずして）（余所ならず）（悪趣　有りぬべき　不可）（浄土遠からず）
・成り（01衆生本来仏なり）（如く成り）（闇路なり）（帰する成り）（余所成らず）（22此の身即ち仏成り）
・余（賞嘆余あり）（余所成らず）
・多き（品　諸善行）（福）
・みみにふるる
・賞嘆～賛嘆

・余り在り～　限り無し　（よそ　ほか外～余処よそ）
・子と成りて～　功を成す人も
・つみ（積みし、罪）
・直　（じき　じしょう）直に自性を証す（道直し）
・道　（直し　行くも帰るも）
・帰　（帰する）（帰る）

和法分析三：『意味』論
和法分析三に関しての視点
・『三宝』仏ほとけ（衆生・此の身）法（此ののり）（のりの声）僧（衆生）（門）（道）
・『浄土』浄土　蓮華国
・『波羅パラミータ』諸波羅蜜
・『己』（己の愚痴）（自ら）（自性）（無性）
・『自』（自ら回向）（直に自性を証す）（自性即ち無性）（既に戯論を離れたり）
・『身　坐す』坐禅和讃ス（この身即ち仏なり）

和法分析結果・考察（和語の音　ことばは言語・論理ではない）
・音から来るもの　声の文化　和語
・意味から来るもの　文字の文化　日本語　文書
・目から来るもの　証し暴きの文化　見える化の現代科学の時代意識（2022/07/21　まどか庸代）

和学形成の流れは、空海（平安時代）白隠（江戸時代）洋楽と邦楽（　通辞通訳による日本語役の営み等々。学術において、外来文化と内在文化の交流は、ひとりの学派を通しつつ、学術の歴史において、思考され続けて日本人が外来言語に四つ学問をベースにする限り、各学者が、問い続ける自文化の学術芸術形成、和学形成を試行錯誤するである。

和学形成はどの時代においても、同時代（その時代の人々にとっての現代）的課題である。なぜならば、その国の人々の生と死の直接的担い手である医者、や宗教者、その時代の「医学」形成は、その時代の学術芸術の最高の智慧の結集。統合領域であり、医者（からだを担う）僧侶（いのり。祭儀　非日常・日常生活を担う）は、その学術集団に属している人物である。

和学形成は、まどかだけでなく。学術の歴史のも営みである、と介したい、自分だけの発想でない事を、空海（真言密教、国教　東寺形成、立体曼荼羅による宇宙論）、白隠（鎌倉仏教臨済宗白隠宗）、本居宣長（儒医学　小児科医）という先人についている。外来文化文明に学ぶ日本人が、学術において、如何にことばにしていきるか。（ことばにしない無相の相を相として、形にしない形にならない，五感だけによらない存在の秘儀、内応した世界の実体を前提とするならば、「道」としてかなり実践生活の中にことばの響き、声なき声の力（言のいのち、言霊）、真心を見いだす。現代の日本人にとっても、日本の学問の方法は、必ずしも「近代の外来の自然科学、物理化学的」だけではない。

まどかの生命科学からの和学形成の前例としては、河合隼雄（近代西欧心理学からの和学）山折哲雄（印度哲学からの「九相図」と日本芸術浮世絵師死相図）

まどかソサエティ カトリックミッションスクールに生まれたニンカン leaning community 現代科学から現代和学への意識化は、まどかと名乗ルことで「家」「家族」「学校」「社会」「個と全体」を生きつつ超える自己統合、自己完結なのである。自他をつなぐひとりひとりのいのちには「自ら」の力がはたらいている。

近代西洋自我（無意識・夢分析）と現代医科学からの「和学」アプローチ法の提唱
河合隼雄・心理学からの和学形成例として

ニンカンスタッフ木村晴子「体験学習によるユング心理学」との知的交流は、河合隼雄の神話的アプローチや日本の昔話導入により、「体験学習による生命科学」ライフサイエンスの風土化と「和いのちからの和学形成」へと鼓舞された。

河合隼雄（1928-2007）は、1995年アメリカ留学後、1965年スイスのチューリッヒにあるユング研究所で、分析家資格を得、それ迄の近代自我確立せねば成らないという信念が代わり、日本の伝統という古い生の様式を個人分析を通して、西洋の自我が最上唯一ではなく、「ユングのいう「自己」の重要性、「自己」に意識的自我が自らを委ねねばならないとしている。自我―自己軸をもつヨーロッパ的な方法に従う以外の方法を提示した。

日本が西洋の個別科学を導入後、筆者まどかの時代は、日本の戦後復興により、日本の経済的発展の1960・1970年代の研究者と共に大学生時期を経た者にとって、「如何に日本にも、日本独自のもしくは戦前の日本風土に根付いている「日本」文化風土の学問と学術方法を、西欧基準の「国際」学会において、発言する機会が得られるようになる。「日本」を平和的学術文化レベルで、「説明」「描写」「記述」する力の養成が必要となってくる。

竹内敏晴とまどか庸代の1996赴任は、「からだとことば」「いのちとことば」というカリキュラム上の「科目名」による学生及び、ニンカンスタッフとの協働的場を得ることにより、「日本」「日本のひとのことば」「み（身、味、実、）を通した、体験的実感的実質的日本型哲学・学術的説明のトレーニングが、織りなされる。

河合隼雄（木村晴子のユング心理学の師）においては、ユングやフロイトの心理学（近代西欧型心理学）に対して日本型心理学方法としての「神話的アプローチ」「物語り、昔話に見る人の心」の研究方法のあることが、スイスのエラノスでの国際会議において1983~1988毎年講演報告された。（河合敏雄訳2013『日本人の心を読み解く　―夢・神話・物語の深層へ』エラノス会議講義録岩波現代全書）

古事記　蛭子迄の神話分析後、河合によると、

「もしも自己実現が「ゴール」ではなくて「プロセス」として理解されるならば、日本人にとってのプロセスと西洋人のそれとを比較することができ、・・・・・・日本の神話、昔話、昔の物語が無意識についての豊かな知識を含み、近代自我とは異なる意識、現代日本人の新しい意識についてヒントを与えてくれる。西洋人が近代自我を超える道を探ろうとしているならば、こうした新しい意識のあり方に関心をもってもらえるのではないだろうか。

第一章　夢に関する中世の物語

第二章　明恵の夢記における身体（明恵の夢日記　夢の解釈と「身心の凝結」状態の達成　現代人との意識状態の違い　心身の連続　デカルトとの根本的違い）

第三章　日本神話　無為の神　日本の神々のパンテオンで無視されてきた神々、「九相詩絵」cf. 現代「九相図」からの申し立て

と続く。

河合隼雄の近代西欧自我を超える道のりは、現代日本人の意識のあり方の描法であると同時に、現代人の「西洋自我からの解放」にもつながるかもしれない。日本の「おのれ」「自己」探究、意識や心の探究は、まどかの20c現代科学に於ける「ひとの生命科学」形成（分子生物学的方法とその研究倫理・生命倫理）と和学形成の試みとベクトルが重なるのである。

生命現象を「遺伝現象」と捉え、限定して、遺伝物質核酸とアミノ酸タンパク質の構想と機能と生合成の研究領域が「分子生物学」として発展した。同時に、「脳」科学で一般に知られるようになった「大脳生理学」の研究領域もJ. ワトソン（DNAの二重螺旋構造発見1953『NATURE誌』によるノーベル受賞者に予告されていた。養老孟司によると、脳は「意識」活動（心理学）の問題ともなる（身体論）。文化や意識とつながってからだが変化する。

意識（こゝろ）と（からだ）をつなげやすい日本文化なのである。身の収斂（禅や実践的実学。茶道。柔道等、修道方法による悟り・真髄との一体化、達観　真理）。生命物質遺伝子（遺伝を担う物質）構造のもつ言語情報や機能研究は意識とは別である。分子生物学はそれではない。

しかし、研究者や医療による遺伝子操作は、人の意識活動・生き方の価値観と密接に関係する。先端医療科学と人間観の緊急課題である。当事者が選択しつつ、医療での会話場面や意思決定に私的レベルと公的レベルの葛藤もある。

しかし、本人の選択場面のときこそ、本人の文化に根ざした本音の言葉に出会う。一生かかることもあるし、一瞬で決まることもある。和語いのちによる和学は、生命の学問のたったひとりのいのちの場面で生かされたい提言である。

脱原発（物理学と人間・経済問題）の如く、脱遺伝子操作（遺伝子工学　bio-technology（生命操作　生物科学生命科学と人間））。化学公害と人間の問題が、日本の敗戦後の「科学技術と社会　人々」の問題として、今日の生命倫理を引き続き意識化している。

山折哲雄　印度哲学者からの和学形成への着眼　浮世絵師
死者の生命描写（日本）と九相図（東洋仏教絵画）

小野寺功「場」としての聖霊と岩手県山折高校同級という山折哲雄（1931 岩手県生）は、京都展覧での浮世絵の描写から、東洋思想とは別の日本の学術芸術の力に出合い、次のような衝撃を記している。人物も含めた風土の働きを和学や場の論理は配慮して成り立つからである。『死者と先祖の話』2017.12.22 角川選書にて、東洋の死生観について、あらためて、柳田国男や折口信夫が悩み苦しんだ時代の背景がみえてくるような気がします。(p.199)

暁斎 KYOSAI 北斎後、（エミールギメ・フェリックスレガメー　フランス人のジャポニズム熱の中）暁斎の描く①「死者」鳥羽僧正「鳥獣戯画」霊長類サル研究の如し。②「骸骨人間」ロボット研究　ロボットアンドロイド工学の先駆けの如し。　③「春画」『九相図』生命科学の枠組みを突き破る発想。其の「近代」の胎動はすでにキョウサイの画業の発想とその技のなかで発酵していたか

もしれません。」(p168)（括弧と傍線　筆者まどか）

室町の臨済僧一休宗純と地獄大夫（堺、一休との連歌問答で悟りを開いた遊女）とキョウサイのいきた（退廃的死相をみる）時代にあって、九相図の中に新たな「骸骨層」の一頁をつけ加えよ、と主張している山折哲雄 2017.12.22『死者と先祖の話』角川選書だろうか」詩歌の伝統の中で開発された「骨」の美学、仏教思想の風圧のなかで育まれた「骨」の形而上学をもう一度復興させようとしているのでしょうか。(p.199)

解剖学者養老孟司は、九相図（柳瀬研究室コロキアム発表資料 1980's）をプロセスとしての死として紹介した。近代西欧医学の身体的臨終は時刻で示す一刻一点ではなく、生と死の連続性は東洋や日本人の死生観には自然で身近なのであった。生命科学からの和学提唱は、身近な人の死をとおしたレクイエムでもある。日本の知識や智慧之歴史と、現代科学を繋ぐことで、互いの生命描写が更に洗練される。この作業も「和学」である。

山本聡美（1970 生）は『中世仏教絵画の図像誌』（2020）から生命連鎖と東洋思想と和歌を通して、人間の関係的論考を意義づけている。

室町時代には漢詩と和歌と九相図とをくみあわせた「九相詩絵巻」も登場する。仏教典から、九相観という、肉体への執着を滅却するために死体が朽ちて吠えになるまでを観相する修行に用いられる図録である。不浄を観じ、無常を詠む。

不浄と無常の表象に留まらず、遺される物の想い記憶が遺る。・・・・・・別の生命が滋養を得る。九相図とは、その連鎖の構造に私たちをつなぎとめるための絵画だと、筆者は理解している。

「一個人で完結した命の時間に閉塞する限り、みずからの死を経験として他者に語ることは無意味である。他者の死に目を開くことによって、私たちは、死とは何か、肉体とは何か、生命とは何かという、人間が人間として生きている上で、不可欠な思想を獲得することができる。」と結語する。(p452)

千玄室に見る　和学の道

利休の遠孫、千玄室15代茶道家元（1923生　百寿）は、特攻隊員経験から戦後、「一碗のピースフルネス、one bowl, one peacefulness」一服のお茶を頂く日本文化の国際交流を通して、平和を推進する文化リーダーである。「和らぎの「の」」（淡交タイムズ 2022.10p.4）によると、「古来より日本人は自然との共生を重んじ、花鳥風月を友とし、『万葉集』では、大半の詩の枕詞に「の」が付きます。「の」はつなぎの役目を用い、和らぎをもたらすものです。

昔は親子の関係を親の子、子の親とよく言いました。学校に行けば、先生の聖徒であり、生徒の先生でした。しかし現代では、親と子、先生と生徒として「と」が入り、絆が破られている様な気がします。これは、戦後の教育が自由や権利ばかりを強調し、人としマナー守るべきルールやマナーの大切さをきちんと教えてこなかったせいではないでしょうか。（中略）初代統一ドイツ大統領ワイツゼッカーさんは「お茶はすばらしい伝統文化であり、総合的な文化でしょう。日本の戦後の教育にももっと生かされるべきだったのではないでしょうか。」と仰り、私（千玄室）は息をのみました。責任を痛感したのです。我が国は万葉の時代から「情け」の国です。その根本と成るのは「和」の心・・人々が「の」の関係で繋がる和やかな世の中になるよう・・・一碗のお茶を通して思いやりの心、いたわり合う心を広めていっていただきたいと願うのです。**(P4)**

ライフサイエンスからの和学のニーズ：生命倫理と西欧人格論への提唱

村上陽一郎 2024「誰の生存か」生存科学研究所ニュースレター

生存科学や生命科学において、生命倫理の各論として、「胎児は人格か　人間か」という問いがある。人間科学という分野が存在するとして、人の生命に、主語があり、「親や母体の生存のために、法的に許容されている「経済的理由」による人口中絶は日本においては合法化される。しかし、その経済的生存は、誰の生存のためなのか。**(P1)**

遺伝子組み替え等、遺伝子操作の科学技術的発展の中で、人間の生命の研究視点を「人格論」としても再度、問いかけている。筆者まどかは、1982-1983-1984と、ニンカン赴任前にスペインのコミリャス大学と倫理学高等研究所のマルシアーノ神父「人格論」の視点を講じられ、上智大学生命科学研究所のJ.マシア神父は「命令形でなく疑問形の倫理」のあり方を生命倫理の先駆けとして提唱していた。答えを与える倫理ではなく、共に疑問を寄せ合いよりそう姿である。

此の事は、1980年代、総合科目「社会と文化」及び「人間関係科各論（女性論　伊藤雅子・川喜田好恵・まどか担当）後に生命論」（グラバア俊子・まどか）として、カリキュラム化して、生命倫理各論を学生のグループ研究や体験学習による気づきのワーク等で、問題意識化しつつ、現代人や現代の男女の価値観や愛と性の課題を考えた。

生命科学の発展は、同時にヒト遺伝子という人の生殖細胞を実験材料とするもしくは医療治療に携わる医療者研究者の人間観や生命観そして、如何に生きるかの倫理観まで問われる、社会的課題となって今日の生命科学の範疇が、専門領域を超える対話の必要がある。西洋西欧型「人格」論及び、カトリック倫理神学と日本の「人格（人らしさ）」論は、今後の医学医者教育や、職業としての医療従事、人としての人生をいき合おうとする日本と世界との平和的共存（人が人をあやめあう戦争状態にしない解決法）の道を方向付ける、

日本の戦中戦後を意識的に生きた世代のニンカンスタッフの、学問形成のもがきの一端を、ここにとどめさせて頂いた。

おわりにて　はじまり

令和元年(2019)より、隠遁生活を心がけておるなかで、論考よりは感謝と祈りのライフスタイルと母親の供養で7年目を迎えている。

和語いのちとことばによる学問づくり、日本文化文明の市井に触れつつ、日本に生まれたご縁で、鎌倉仏教・真言密教・キリスト教間の対話・日本の学術と芸術を問うている。

筆者は1970年高校生のころ、
「わたしは道であり、真理であり、いのちである」（ヨハネ14:6）
というイエスが自らを表明することばに「いのち」だけが「平かな」であり、この「いのち」とは何か、イエスのいう「いのち」を知る道に進学する領域として現代科学の「生命科学　ライフサイエンス」「分子生物学」を、私学に求めた。1970年同時代的には、江上不二夫（1910-1982 生化学 オパーリン「生命の起源」訳者　1944~1958 名古屋大学理学部教授）が、（当初公立では埼玉大学理工学部に「分子生物学」科創設、後に1971三菱生命科学研究所設立、日本の生命科学領域と、分子生物学という生物系と非生物系数理物理化学の境界領域形成を牽引した。京都大学ウィルス研究所渡辺格と三浦謹一郎、本庶　利根川進　東京工業大学生命化学専攻（畑）　科学史（道家）に出会う。

昭和60年（1985）南山大学女子学生寮寮監しつつ、南山大学神学部にて神学基礎論（マルクス師による　カール・ラーナー　百瀬文晃訳『キリスト教とは何か　ー現代カトリック神学基礎論』エンデル書店）聴講する。上智大学にて科学基礎論（柳瀬陸男・村上陽一郎）コロキアムメンバーで、自然科学概論講師として、人間関係哲学的基礎論のスタッフチームティーチングや南山大学総合科目「人間論」を担当させて頂いた。南山という新天地の人間観を知りたく、
ヒルシュマイヤー当時学長担当の「人間論」「人間の尊厳のために」という講義を聴いた。
「わたしは真理であり、道であり、いのちである」（ヨハネ14:6）は、南山大学ヒルシュマイヤー当時学長が引用した聖句であり、「真理」の探究を学生や研究者に鼓舞する文脈で触れた。
昨今ではマリアヌス・パレ・ヘラ師の論考（2024）にもある。「「私は真理であり、道であり、命である。わたしを通らなければ、・・」（ヨハ14:6）に見る多様性とインクルージョン」『社会と倫理』特集カトリックとインクルージョンでは、ヨハネの描き方の特徴に気づかされる。はじめにありき」のことばであるキリストを通してという排他性と「互いに愛しなさい」という全ての人々に開かれインクルーシブな包括力が示唆された。

新約の共観福音書（マルコ・マテオ・ルカ：記述法共観とは区別されるヨハネいて、「もう一つ別の方法や視座があることを示唆するものである。沈黙もことばとなる和語和学和歌行間のよみ方、方法論の共通項をみる。ひとの「生命」を物理化学生物学的方法だけでなく、もう一つ＋α　する研究アプローチ法や視座を実践的に、ニンカン生活を通して探究した筆者まどかとしては、人の命・いのち・生命の学問、生命科学領域の方法論研究において、「新約聖書のヨハネ」の方法論は、「白隠坐禅和讃」「空海のいろは歌と般若心経」「西周の近代西欧学問領域と概念の漢字和訳」などと併せて、20c 生命科学からの和語いのちによる和学に至る「いのちとことば」（まどか 1986-1995-1996-2000-2012）へのモデルであり、めざす潮流である。

復活のイエスをこの手で「見るまでは決して信じない」（ヨハネ 20:25）と伝えられているもうひとりの弟子「トマス」の現代の科学的態度や知的方法とは異にする、＋α の方法とは何か？「見ずに信じる人は幸い」（ヨハネ 20:29）と諫められた「信と知」「愛と知」は、共に、許されるアカデミズムのあり方が、現代の生命医科学技術の発展の世紀において、問われ直されたい。学術と芸術の対話、形而上学と形而下学の行き来、宗教者と科学者と医者の意識の対話的交流は、ライフサイエンス形成からバイオテクノロジー・バイオエシックスの領域形成の風潮の中で、ここ 60 年間程かかり、医領域のシンポジウムも多様になった。19c 自然科学が文化の問題や人の意識の問題に近づいたのかもしれない。それは懸念でもあるが、一方、現実社会では「科学と人間」「生命科学と生活」「医科学と医療と人らしい生と死」のテーマに、国民全体が応えていくテーマである。人々の態度が問われている。大人から子どもまで、赤ちゃんから老人、そして眼には見えない無くなった方々の思いまで、答えを共有する場の設定が必要である。家庭サイズ、仲間サイズ、情報のサイズも、自律的に自己管理できる関係の調整、バランス感覚は、こどもとおとなの癒しや許し合いの繰り返しのなかで育まれる。

1950-60 年代の欧米から日本への生命科学という領域形成（ライフサイエンスの風土化）と分子生物学 Molecular Biology 的アプローチという「ひとの生命」研究方法の普及には精密科学（Exact SCIENCEs 数理、物理・化学（非生物学）と生物学との対話「境界領域形成」、自然科学と社会・人文学との実践的学際的アプローチの探究に、直接関与するテーマがあった。（沢田允茂 1976『ライフサイエンスの哲学』講談社）

「ライフサイエンス」領域形成台頭期は、戦後の人間らしさ探究と物理学者が「生命」という人間と神と自然の関係性を問い始め、「自然科学」領域が自覚的に「倫理」的課題を包含する領域形成に潮流が蠢き始めたのである。

上智大学カトリック大学の「生命科学研究所」創設の意義に創設期生（1979）として「ひとの生命」「いのちとことば」というテーマで論理と非論理の異文化間の関わりが、異文化間のバランスや平衡が見いだせることを期待している。

日本が本来もっているこの「いのち」のバランスや調和力は、「無の思想」「愛の思想　日本流の方法を、どのようにことばにしていたら良いのか。

「寄り添う」という姿や「身のことば」も日本の大切にし合いたい「言語化」「自己化」である。

学術学究生活に携わると信仰生活に生きる者として、共通に拠り所となる「ことば」であることにあらためて、自分自身のライフワークを自覚し内省する時機を得ている。筆者自身は折々の「いのちとことば」生命科学を平仮名のいのちということばで研究する事の意義に触れる時に、自身が出合ったことばとして、必ずこの聖句に立ち戻る。祈りのうちに。祈りには、呼びかけ合う相手が在る。

「人のいのち」という日本語や和語「いのち」の探究法は、学術として未だ模索中である。しかし、1980年代には「まどか」「いのちとことば」「こころ」（心とは別の語意のニュアンスをもたせる表現など、平かなの「いのち」をしようするという包括的志向が生まれていた。落合恵子（クレヨンハウス代表）や大林雅之（後の生命倫理学会会長）は「いのち」という視座を推進し、カリキュラムや科目名に「いのちとことば」「生命科学と日本文化」を手がける筆者としては心強い味方であった。人間関係科誕生時代の「戦後敗戦語の人間性復興」「宗派を超えるエキュメニカル」「際を超える学際や国際化」から現代の地球意識と個人の平衡性バランスを「学」の世界に問うている。日米関係重視の日本国の「人格」形成「自己」「自他」との出合いを通して、「関係的存在としての人間存在」の自己化と社会化の教育が、ニンカンの場で実現し、亦自己実現としての仕事場であった。学生も教員も人として個の確立（大人に成る、成人化過程）を共にする教育研究共同体 learning Community であった。学際的人間関係科・研究セン

ターを、山口真人（元センター長・五代最終学科長）は、自然科学概論（一般教育枠）で採用されたニンカンスタッフまどかと共に文理一体統合的に意識していた。自然科学概論はのち「生命と環境を守るために」の領域で命名も生命科学論　生命倫理含むと変遷していく。

人間関係科の中心的カリキュラム「人間関係トレーニング（T）グループ」一週間合宿授業形式と教員スタッフによるテーマ別ワークショップ合宿、そして、ニンカンで得た「行動療法 Action Therapy　アサーティブネス・トレーニング」「こころとことば」「いのちとことば」まどか 1986-2018 実施　医療や人生の四段階「生まれる・産む・看とる・死す」人生の選択場面での素直な自己表現ワーク）と自他の人間性尊重・人権という米国民主主義の発想から日本人の本音にも気づきあう。日本型の民主体の発想や自分の生命観や価値観に出会うワークも「いのちとことば」や竹内レッスン、KJ 法等も応用した集いも企画させて頂いた。

「真理は人を自由にする」自他の本音や本当の気持ち、本物に出会うことの大切さ、行動変容という act の時代に 30 歳代 40 歳代教育研究の自己実現としての仕事場を与えられた。あらためて、ここに、カトリックネットワークと一貫教育研究共同体をめざす南山学園のいのちに感謝申上げる。

かな読み書き　いきづかいに和心がこもる呼吸　思いやりの呼びかけ

三宝、仏法僧、教師にして学問と近代化の大学システム形成を担う僧侶や宗教者や大学教職者としても、祈りのことばも「真理」と共に、日本仏教や学術芸術の基盤に関わる。空海も「『真言密教』『声字実相』『五大に響きあり』の宇宙論を遺している。日本の神話や天皇暦も、アーカイブ史料古文書の遺り方としては、上（カミ）の名で時代が記述される。上の名　カミの名（かんな、カナ、仮名）は和語をもたらす）かな「仮名」（仮ノ名）の音の響きで、呼称される。

和語和学のことばは、日本古来の「かな文化」「かな文書」「かな文学「かな字」が、日本人のこころのもしくは身体的からだに響く「音文化」音、もしくは、本来呼びかけ合う名前や現代国語の文法のいう「名詞」「体言止め」の文章が、行間と共に人々のこころに伝わりやすい質を、もっているのではないか。美しい日本語　響き合う空間環境人間環境が、国会等成人の代表による議会

制民主主義の二律背反的議論・多数決原理とは別に、用意されることは、ひととき背筋がのび、天地のいき（呼吸　虚空）がつながり、自芯（自身　自信）のある実を結ぶであろう。

謝辞　永井英治氏の洞察力と南山アーカイブス村上さん方のご尽力に心より御礼申上げます。祈りのうちに。

〈竹内敏晴　引用・参考文献〉

竹内敏晴『老いのイニシエーション』岩波書店
竹内敏晴『竹内レッスン』春秋社
竹内敏晴2014セレクション『竹内敏晴の「からだと思想」』
1　主体としてのからだ（藤原書店）
2「したくない」という自由　（藤原書店）
3「出会う」ことと『生きる』こと（藤原書店）
4「じか」の思想（藤原書店）
竹内敏晴1975『ことばが劈かれるとき』思想の科学社
竹内敏晴　木田元2003『待つしかない、か。二十一世紀身体と哲学』春風社
竹内敏晴1983『からだが語ることばα＋教師のための身ぶりとことば学』評論社
井上俊　竹内敏晴　養老孟司　市川浩他共著1996『岩波講座現代社会学　第4巻　身体と間身体の社会学』岩波書店
養老孟司1996「日本的身体論」『岩波講座現代社会学第4巻　身体と間身体の社会学』岩波書店

鈴木大拙 1944『日本的霊性』岩波文庫
亘明志 1991「メディアと身体」『身体と間身体の社会学』岩波書店
オング 1991 桜井直文・林正博・糟谷啓介訳『声の文化と文字の文化』藤原書店 Walter J. Ong. 1982[Orality and Literacy]
松岡正剛 2002.11.25「千夜一夜 666 夜『声の文化と文字の文化』ウォルター・オング」編集工学研究所
大森荘三 1982『新視覚心論』東京大学出版
棚次正和 2024「論証知と直観知の統合―新しい「知」の在り方を求めて」学 MIND-BODY SCIENCE No.34 特集 新しい「知」の在り方を探究する人体科会 p22-23
鮎澤聡 2024「共感を通し多空間の創出~疑う知から愛の知へ~」
MIND-BODY SCIENCE No.34 特集 新しい「知」の在り方を探究する人体科会 p26-2
湯浅康雄 1990「心身一如論の現代的意義」『身体論 ―東洋的心身論と現代講談社学術文庫
竹内敏晴 1988『時満ちれば「愛」へと至らんとする15の歩み』筑摩書房
竹内敏晴「愛の侵略 マザー・テレサとシスターたち」「戯曲 愛の戦略をめぐって」『セレクション 竹内敏晴の「からだと思想」4「じか」の思想』Ⅲ 愛の侵略 藤原書店
南山学園 1992「愛の侵略 マザーテレサとシスターたち」上演記念写真『人間関係科通信』表紙写真
南山学園展示 2017 南山短期大学（人間関係科 英語科展示）
矢萩多聞 2002『インド・まるごと多聞典』春秋社
矢萩多聞 2014「竹内敏晴さんとの仕事」『偶然の装丁家』晶文社 p.177-184
山口真人 2010.2.10「竹内敏晴先生を偲んで」『ニンカン・ネット通信』Vol.9, p.1
13期糠谷明子 16期杉田純子 2010.2.10「竹内先生を偲ぶ会 東京 2009 年10月18日 名古屋 2009 年11月22日」於賢治の学校、大橋元学長によるミサ於神言会ハウス聖堂＋ベタニア『ニンカン・ネット通信』p.6, p.7

まどか庸代 1994　竹内敏晴先生退任インタビュー『人間関係科通信』南山短大
まどか庸代 2001『人間関係研究』創刊号　南山大学人間関係研究センター

〈まどかソサエティ家庭モード変換 20c 社会変革ニンカンの源流　山出半次郎　引用・参考文献〉

森鴎外『西周伝』（絶版）
西周（文政十二旧暦二月三日 1829.3.7- 明治三十 1897.1.31）『百学連環』
山出半次郎 1929「やましゃくやくトべにばなしゃくやく」『植物研究雑誌』五巻11号 p405-407
山出半次郎・大野虎雄 1937「沼津兵学校と同附属小学校」『静岡県郷土研究』第9，昭和 12.10
大野虎雄 1939（沼津史談会創設者、第2代会長。沼津市社会協議会、郷土史）史料「沼津兵学校とその人材」昭和14出版
不二聖心女子学院　「校長室から　フジザクラ」『フィールド日記』2013.5.17　https://fujiseushin-jh.ed.jp>2023/10
佐野美術館 1995「植松家と文人墨客ー東海の名園に遊ぶー」佐野美術館（植松嘉代子寄贈　東京国立博物館蔵）
「帯笑園を訪れたF・シーボルト（一七九六・一八六六）」『帯笑園案内』p.11 帯笑園保存会発行（静岡県沼津市原）
小野佐和子 1997「駿河原宿帯笑園の訪問者についてⅡ　ー宿内とその周辺からの訪問者ー」千葉大学園芸学報、第51号 p57-66
小野佐和子 1996「駿河原宿植松家の帯笑園」『ランドスケープ研究』、59(5), 9-12
大澤敏夫 2024　史料ファイル「帯笑園関係論文集」帯笑園保存会（帯笑園内）
大場秀章「伊藤圭介・学問のアルケオロジー」東京大学総合研究博物館　https://umdb.um.u-tokyo.ac.jp 202408）
大野虎雄 1939『沼津兵学校創立七十周年記念会誌』昭和 14.5.30「沼津兵学校と其人材・附属小学校並沼津病院」
植松善夫 1987「薬草・教育・桜ー御高初代校長・山出半次郎」仁藤祐治『岳麓漫歩（＋）ー一枚の絵から写真からー』悦声社
P193-217

川嶋虎雄 1983『学校体育の史的研究　その18』(14)
橋尾四郎 1969「沼津兵学校とその附属小学校ー日本近代教育の原型ー」Japan Society of the history for Education
橋尾四郎 1966「静岡藩における近代学校の成立過程その２　ー大学規則並中小学規則との関連を中心としてー」Ⅱ教育史大９会大会記録　個人発表論文要項 Japan Society of the history for Educationp.127-129
（別稿　静岡県立教育研修所研究報告）
影山昇 1994「明治初年の静岡藩の学校教育―静岡学問所と沼津兵学校及び同附属小学校を中心にしてー」放送教育開発センター研究紀要第11号、p.81-128
本居宣長・植松有信他「鈴屋」円居
「鈴屋円居の図」1827 文政十（本居宣長記念館所蔵）
蛭田芳郎・植松八千代・蛭田宗知・宗庸 1959-2017.3「まどかソサエティ」素芳庵　圓明院
植松茂彦・茂共編 1981『植松有信遺文集』光書房（「駿河の植松家」善夫家平野屋所蔵　松坂市本居宣長ノ宮植松有麻呂住職より
南山大学まどかアッセマ＝植松八千代長女への寄贈本・系図添付　心理人間学研究会滞在の折）
植松茂 1979『植松有信』pp427 愛知県郷土史料刊行会
ASSEMAT Andre1960-2018.5「Le Mortier」

〈wa まどか和学　生命科学からの和学形成　日本という方法　引用・参考文献・史料〉

バルバローデル・コル訳 1964『口語訳旧約新約聖書』６版　ドン・ボスコ社
禅聖典編集委員会編　笠井昭造　五十部令侑 1987『禅聖典』　円覚寺仏日庵（まどかソサエティ菩提寺）
ベルナール・フランク『平安の方違え』岩波書店（絶版）

ベルナール・フランク 1996『風流と鬼ー平安の光と闇ー』平凡社
源為憲 984「鹿王」『三宝絵詞』（東京国立博物館所蔵）
本居宣長『古事記伝』版植松有信出版（南山大学図書館所蔵）
小林秀雄『本居宣長』『本居宣長補記』新潮社
鈴木淳・岡中正行・中村一基 1984『本居宣長と鈴屋社中　ー『授業門人名簿姓名録』総合的研究ー』錦正社
横田南嶺 2023「圓同大虚　無欠無余」『信心銘　令和五年第八十七回夏期講座講本』2023.6.1 円覚寺方丈間「信心銘提唱」円覚寺
p.3　遠順相争是為心病　不識玄旨徒勢念静圓同大虚無欠無余　良由取捨所以不如
アッセマ庸代 2009「江戸の多文化共生パラダイム」（本居宣長と平田篤胤）
浅香幸枝編『地球時代の多文化共生の諸相　人が繋ぐ国際関係』行路社　南山大学地域研究センター共同研究シリーズ 1
アッセマ庸代 2012「ソフトパワーとしての和学」浅香幸枝編『地球時代の「ソフトパワー」内発力と平和のための知恵』行路社
　南山大学地域研究センター共同研究シリーズ 4
アッセマ庸代 2009「Holistic 意識空間を醸す」展示学会
アッセマ庸代 2009「博物館の意識空間と心理的会アプローチー Holistic Space としての展示照明環境のイメージ測定」黒沢浩編『学術資料の文化資源化』文部科学省 ORC オープンリサーチセンター（私学研究高度化支援プロジェクト 2006-2009 年度報告書（代表　黒沢浩）　南山大学人類学博物館リニューアル計画時期。
まどか庸代 1999「人間関係科ニンカンの終焉と共に」『人間関係』Vol.17
まどかアッセマ庸代編・グラバア俊子・笠島淑恵 2003「「空間の性格」で大学を生かす：建築空間提案～空間・時間・人間とのホリスティックアプローチ～」『京都大学高等教育研究』第 8 号、p114-129
南山学園史料：人間関係科 新学科構想、山里キャンパス D 棟多目的教大・中・小教室設計図面、笠島淑恵工房作成資料（南山学園アーカイブへ、アッセマ提供 2019.3 南山学園史料室保管

マリアヌス・パレ・ヘラ 2023「私は道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、…」（ヨハ 14:6）」『社会倫理』特集　カトリックとインクルージョン　社会倫理研究所
佐藤啓介 2024「一人でいることと、死者との継続する絆」
2024.8.1、『独りでいることの社会倫理』第3報告、社会倫理研究所・上智大学生命倫理学研究所共催シンポジウム
佐藤啓介 2019「（死者の尊厳）の根拠ー下からの倫理の試みー」『宗教哲学研究』38,p.29-43. 宗教哲学会
K.J. ガーゲン著　永田素彦・深尾誠共訳 2004『社会構成主義の理論と実践』ナカニシヤ出版　GERGEN , Kenneth J. ,1994 Realities and Relationships— Soundings in Social Construction (Harvard　College)
トーマス・S・クーン　青木薫訳 2023『科学革命の構造　新版』原著刊行50周年記念版イアン・ハッキング序説、392p. みすず書房
トーマス・S・クーン　中山茂訳 1970『科学革命の構造』277p. すず書房 Thomas.S.Kuhn 1962 "The Structure of Scientific Revolutions" (Chicago Univ.)
横山輝雄「社会構成主義と科学技術社会論」柿原泰・川田勝・小川真理子他編 2016『村上陽一郎の科学論』新曜社 p.303
村上陽一郎 2024「誰の生存か」『生存科学研究ニュース』vol.39, No.2 生存科学研究所
村上陽一郎『信と知』新曜社
大林雅之 2024「生命科学と生存科学をつなぐものー「生存の理法」を求めてー」特集　生存科学の可能性＝人間・社会・自然・歴史の総合学『生存科学』Vol.34-2 p.91-101, 生存科学研究所
松田正己 2024「現代生活の悪循環による生存危機と健康福祉対策の将来ーデゥボスと武見太郎の生存科学」『生存科学』Vol.34-2,p.69-79 生存科学研究所 p.76
松岡正剛 2006『日本という方法　おもかげ・うつろいの文化』日本放送出版
松岡正剛絶筆 2024「編集工学的読書」特集“読む”の諸相『学燈』Vol. 121,No.3,
秋号、P3-6, 丸善

竹内整一 絶筆 2023『「おのずから」と「みずから」』筑摩書房
竹村牧男 2021『空海言語学　声字実相を詠む』春秋社
竹内ケン 1945『医学と戦争』（広島日赤病院初代院）　手記（1945 8月7日～）遺品等、孫の竹内道氏より医師会へ寄贈を機に公開（於、県医師会館）
「病床日誌」NHK2024.8.14 放送「広島原爆　いのちの塔」20240814
若松英輔 2024『宗教・人生「ヴィクトール・フランクリン　それでも生きる意味」』NHK こころの時代 2024.8.24　NHK 出版
篠原資明 2006「神秘系機械系　アビラのテレサと印度のテレサ」『ベルグソン　ー＜あいだ＞の哲学の視点から』岩波新書 p.195
篠原資明 1992『トランスエステティークー芸術の交通論』岩波書店、１９９２
篠原資明 2001『まぶさび記―空海と生きる』高文堂
山折哲雄 2017『死者と先祖の話』角川選書 p168,p.199
山本聡美 2020『中世仏教絵画の図像誌』吉川行弘文館 p.452
小野寺功 2003『聖霊の神学』春風社
佐藤陽子・春間「ニンカンの授業　いのちとことば」『人間関係科通信』
加藤理穂・鈴木知佳・松本道子・安田「まどかソサエティ」「宗教と科学の対話」1993.7.7　熱田神宮

〈ニンカンスタッフの心理学的背景と実践 Therapy〉

木村晴子 1985『箱庭療法　基礎的研究と実践』創元社
桑原知子 2014「巻頭言　木村晴子先生の「遺産」を受け継いで」Archieves of Sandplay Therapy,Vol.26,No.3 p.1-2

霜山徳彌訳　ヴィクトール・フランク「夜と霧」みすず書房
霜山徳爾、沼野元義訳、エリザベス・キュブラー・ロス 1982「生命ある限り：生と死のドキュメント」産業図書
小林純一（1911-19）　上智大学カウンセリング研究所（公開講座前身）
『カウンセリング序説　ー人間学的・実存的アプローチの一試み』金子書房
小林純一先生追悼号『上智大学心理学年報』(9) p1-66 上智大学綜合人間科学部心理学科
柘植明子、竹内粂共訳　カール・R・ロジャース、ベアリー・スティブンス『人は人によりてのみ　されどー心理学におけるこの新しい潮流ー』明治図書
富山はつ・柘植明子（エンカウンターグループ）・関口（精神医学）1976～日本女子大学櫻楓会主催カウンセリング研修会カウンセラー養成講座
A.H. マズロー 1954 小口忠彦訳『人間性心理学　MOTIVATION AND PERSONALITY』
河合隼雄 Hayao, KAWAI.,1995 DREAMES MYTHS AND FAIRY TALES ON JAPAN, Daimon Verlag Einsiedeln. (Swizerland)
河合敏雄訳 2013『日本人の心を読み解く　―夢・神話・物語の深層へ』岩波現代全書 in『エラノス年報』Vol.52-55, エラノス会議講義録 1983,1984,1985,1986,1988.
まどか庸代「言相と幻相」『南山短期大学紀要』
〈南山学園史・南山大学長メモリー・マリアハウス・ニンカン史等　引用・参考文献・史料〉
和木康光 2010.6.1 初版『人間の尊厳のために　南山学園の歩み』南山学園発行、中部新聞企画制作 ,pp324, p.209-210, p.205,209-230
永井英治 2020「南山大学史におけるヒルシュマイヤーの時代」『アルケイア　記録・情報・歴史』第15号、南山学園アーカイブス
奥田太郎・岡部桂歴史編 2015『工業化と起業家精神―ヨハネス・ヒルシュマイヤーの時代』2014.6 シンポジウム記録、南山大学

社会倫理研究所

（経済学研究におけるヒルシュマイヤーの特徴として・大局的・という形容されている。）

まどか南山大学女子学生寮マリアハウス舎監（当時南山大学総合科目「人間論」非常勤・南山短大総合科目「社会と文化」非常勤・人間関係科女性論非常勤・上智大学科学基礎論柳瀬陸男研究室コロキウム・南山にて東大科学史科学哲学修了者による研究読書会）として、ヒルシュマイヤー三代学長時代「人間の尊厳のために」の講義を南山大学を知るために聴講していた。同時期神学院にてH.J. マルクス（後五代）学長の『キリスト教とは何か－現代カトリック神学基礎論』（百瀬文晃訳、エンデルレ書店）カール・ラーナー（1904-1984イエズス会士　20c代表的神学者　宗教的包括主義）を聴講する。当時ロゴスセンターミサ司祭はR.リーマー（後四代学長）、シューベルト短大学長時代にであった。生命倫理は濱口吉隆神父（グレゴリア大学留学より帰国）、阿南成一『安楽死』研究（社会倫理研究所所長）、土田友章（宗教文化研究所　人間関係科哲学非常勤）によるホスピス創始者訪問（ニンカン11期生同伴）の時代だった。

まどか庸代の恩師上智大学柳瀬陸男当時学長のお伴で、ヒルシュマイヤー学長へ表敬訪問。神言会神学校聖堂にて初対面。

上南戦（上智大学との年次スポーツ大会。会場が隔年交替で、南山勝利の年は学長が参加学生たちによってプールに投げ込まれる。）

アカデミックレベルでは上智南山の研究者交流が、南山大学社会倫理研究所と上智大学生命倫理研究所（前身は、筆者出身の上智大学生命科学研究所）

外国語学部イスパニア語学科教授マリアサラシン寮長よりの依頼により、ヒルシュマイヤー学長葬儀ミサのための遺影預かり、白花装飾担当（協力　花の館高坂ひろ子）。

川喜田二郎 1967『発想法－創造性開発のために』（KJ法）（中公新書）

星野欣生「南山短期大学人間関係科の体験学習の概観　－10年の歴史と展望」『人間関係』特集　人間教育における体験学習

津村俊充・山口真人編・南山短大人間関係科監修 2005『人間関係トレーニング－私を育てる教育への人間学的アプローチ』pp.206

ナカニシヤ出版
津村俊充・石田裕久編・南山大学人文学部心理人間学科監修 2010『ファシリテーター・トレーニング―自己実現を促す教育ファシリテーションへのアプローチ』pp.205 ナカニシヤ出版
林雅代 2013「吉川房枝インタビュー記録 ―南山短期大学人間関係科設立にまつわるエピソード―」『アルケイア』第7号、2012年1月26日 於カテキスタ会本部（グラバア俊子 アッセマ庸代同席）、南山大学史料室 p.201-245
まどか庸代 1988「現代科学における個と集団の問題をめぐって―原子論からバイオホロニックスの発想まで―」特集グループの中に生きる『人間関係』Vol.5.

南山短大人間関係研究センター『人間関係』創刊号 1984～第17号 2000.3.20
南山大学人間関係研究センター『人間関係研究』創刊号 2001.12.10～至現在
『人間関係研究センター』（スタッフによる年次公開研修会・講演会案内）
南山短期大学学十五年史
南山短期大学三十年史
（一般教育家田足穂 英語科山田隆 人間関係科まどか蛭田庸代編集委員会）
南山短期大学ブリティン
（38号カラー写真集 1999.3.15・37号「創立30周年記念特集号」1998.10.31）
南山短期大学紀要
人間関係科通信～1999（以後 ニンカン卒業生によるニンカンネット）
南翔会（南山短期大学同窓会）シューベルト学長命名 南山大学同窓会

ニンカンネット　伊藤雅子南山短大名誉教授の呼びかけによる（ニンカン一期〜二十七期卒業生によるニンカンのためのネット）
ようこそニンカン 10th 於　元南山短大パテオ中庭
ようこそニンカン 20th 於　元南山短大パテオ中庭
グラバア俊子・人関50周年プロジェクト実行委員会　1-11 期生10名不破・小川・林・藤井・藤田他編 2024「ニンカン同窓生「ニンカン♡タペストリー」2024.5.4　於　私学共済ホテルガーデンパレス　200 人以上。

〈ニンカン生の学習研修のための宿泊施設〉

元マリアハウス（南山大学女子学生寮）神言会会員寄附による定員 100 名　テレジア会 pia union 委託管理、平針カトリック教会隣接　定員 100 名　全個室
元ベタニア（南山短期大学研究室古民家　小聖堂　学生宿泊施設）シューベルト学長　小知和優江管理
清泉寮　長野県清里　キープ村（アングリカン牧師による開拓地）
御岳名古屋市民休暇村
加子母村　民家五件程　新入生全員オープニング生活合宿各家にスタッフ二名学生約十名単位で五日間生活。
信州左右村　民家五件程

共同体として、生活も共にして学ぶ集中授業（通称、合宿授業）は、ニンカンの学び方と研究の基盤にあった。閉鎖系から自己開示開放系へ価値システム・文化となっていた。

＊Table.　ニンカンスタッフの留学先研究テーマ（南山短大教授会資料参照要）
以下は口伝によるスタッフ間の尊重関心領域。(1970~1990's)
R.A.Merritte　北欧「環境教育」
吉川房枝　USA「教育心理学」
伊藤雅子（南山大学卒業生カトリック特待制度による）USA セントルイス大学「家族社会学」
会沢俊三神父「教育」
藤岡グラバア俊子 USA「ダンスセラピー　ボディーワーク」
星野欣生 USA　NIT　「T グループ」
山口真人 USA カリフォルニア大学「合流教育」・アジアボランティアプロジェクト
中堀仁四郎 USA フィラデルフィア大学「家族セラピー」
津村俊充 USA　(MIT) マサチューセッツ工科大学・NIT「T グループ」
大森正樹イタリア国「東方教会」
中野清ドイツ国「日本哲学」
木村晴子スイス国　ユング研究所「ユング心理学」
樋田大二郎 UK 英国　「教育社会学」
竹内敏晴（帰国後勤務五年以上の年令制限により研究留学なし）インド国
市瀬英昭神父オーストリア国　ウィーン神言会神学院本部・イタリア国　バチカン「典礼神学」
まどか蛭田庸代スペイン国（イエズス会）「生命倫理学」「人格論」・フランス国「日本学」「死生論」
中村和彦インド国「T グループ」・USA N.I.T.「T グループ」
楠本和彦　国内留学開始（南山大学移籍後）京都　佛教大学博士過程博士号取得「箱庭療法」「臨床心理」
川浦佐知子（人間関係科七期卒業生25周年着任博士号取得）・USA「ディープエコロジー」・（南山大学移籍後）USA

（生命科学からの和学形成の研究経緯 1968~2019）

国立がんセンター研究所生化学部（Bio-Chemistry）、国立遺伝学研究所分子遺伝部（Molecular Bio-logy）、上智大学生命科学研究所理論物理科学基礎論生命科学論（Bio-Ethics Bio-Technology ライフサイエンス形成）、南山短大人間関係科・南山大学・人間関係研究センター、東大先端科学技術研究センター科学技術倫理相関大部門協力研究員、コミリャス大学（イエズス会）倫理学高等研究所、コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所招聘研究、日本スピリチュアルケア学会発起人、生存科学研究所シニア会員　日本ホリスティックス医学協会理事　国際茶道協会、まどかソサエティ元副主。

天ケ下　すべてに　時（それぞれ時機）がある

（コヘレト *3:1-11*　朗読　中堀仁四郎）